

論説：

植民地後期ケドゥーにおける内地市場向け煙草の生産構造

植村 泰夫

はじめに

植民地期ジャワの住民農業の中で、ほぼ100%販売向けに作られる代表的な作物が煙草である。農民が栽培した煙草は、葉煙草の形で買上げ商人やヨーロッパ煙草農園によって買上げられてヨーロッパ市場へ輸出されるブラッド、クロソックと、ジャワを中心とした内地市場で消費されるケルフ(刻み煙草)に大別される。これまでのジャワ煙草に関する研究ではもっぱら輸出産業としての前者が注目され、その栽培の中心地である王侯領やブスキについての研究は比較的進んでいるが⁽¹⁾、後者の生産・流通に関してはなお十分とはいえない状況にある。この中でマドゥラを対象にしたJonge [1984]は、煙草の生産とともに特にその流通システムを戦前・戦後を通して詳細に検討しており、注目に値する研究である。ただ、マドゥラの栽培は歴史が比較的新しく市場も限定されており、内地市場向け煙草生産がジャワの社会経済に与えた影響を歴史的に検討するためには、必ずしも適当な対象地域ではない。

内地市場向け煙草生産の中心地は古くから中部ジャワ山間部のケドゥー理事州及びバニュマス理事州北部であるが、これらの地域における煙草生産については植民地期にいくつかの調査・研究が行われている。時期の古いものから挙げるとVerslag Garoeng [1906] (1900年代のケドゥー理事州ウォノソボ県Garoeng郡の栽培調査報告)、Stenvers [1915] (同理事州トゥマングン、マゲラン県の1910年代半ばの煙草栽培を論じた報告)、Fruin [1923a] (1923年7月に実施された現地調査

の報告)、Fruin [1923b] (この現地調査報告をもとに書かれた論文)、Tabak [1925] (植民地政庁税務局Dienst der Belastingenが刊行した植民地各地の煙草栽培・生産に関するモノグラフ)、Heijden [1935] (1930年代半ばのウォノソボ県での煙草栽培に関する調査報告)などがある。これらは当時の煙草栽培・生産に関する多くの情報を与えてくれるものであり、特にFruinの2著作は最も包括的にこの地域の煙草栽培・生産・流通を論じている。ただ、いずれもそれが地域経済の中でどのような意味を持ったかについての検討は十分ではない。

そこで本稿ではこれらの調査報告などに依拠して、内地市場向け煙草の生産と加工がどのような構造的特質を持っていたのかという点を、ケドゥー理事州ウォノソボ、マゲラン、トゥマングン県⁽²⁾の事例から分析する。以下では先ず、ケドゥーでのこの栽培の発展にはどのような特徴があったかを検討する。次いでこの地域の栽培・加工の特質を分析する。そして、それらを踏まえて最後に煙草栽培の利益がどれ程であり、それが地域経済・農家経済にとってどのような意味を持っていたかを考察したい。

第1章 ケドゥーにおける内地市場向け煙草栽培の発展

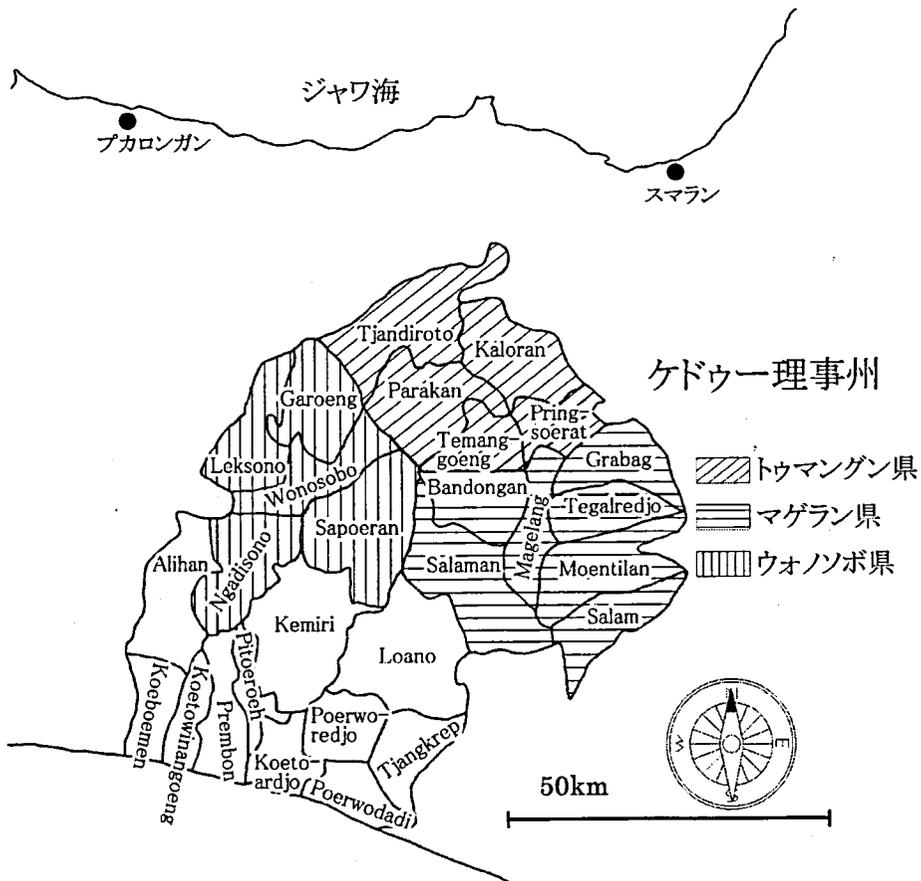
1. ケドゥー煙草の栽培面積の拡大とジャワ内での位置

(1) 19世紀初頭までのケドゥー煙草

煙草がインドネシア群島に伝わったのは16世紀

末のことで、通説ではポルトガル人がもたらしたとされる。これ以降、早くも17世紀前半にはジャワでこの栽培がかなり広範に行われており、当時のケドゥー(トゥマングン県、マゲラン県)は18世紀にはその中心地として知られており、1746年にこの地方がオランダ東インド会社の支配下に入り、会社がマタラム王国から同地方の煙草取引独占権を認められると、それは3,000スペイン・レアルの収入をもたらしたという[Fruin 1923a: 349~351; C.E.I., vol.1: 113~115]。

19世紀初めには、Raffles[1917: 134~135]によると煙草は現地語でtombákuあるいはsátaと呼ばれジャワで広く栽培されていたが、それが輸出向けに広範に栽培されるのはケドゥーとパニユマスのみで、特にケドゥーでは米に次ぐ重要な栽培品だった。またCrawford[1820, vol.1: 406~409]も同様に煙草の主産地としてケドゥー、ラドック(Ladok=Ledok、後のウォノソボ県)、及びパニユマスの肥沃な谷と高い山の麓を挙げている⁽⁴⁾。



(2) 強制栽培制度期～1873年の内地市場向け煙草栽培

ジャワでは1830年から強制栽培制度が導入されたが、煙草についても31年にヨーロッパ市場向け

にマニラ煙草をパスルアン、クラワンで試験的に栽培したのを皮切りに、翌年以降、各地で栽培が開始された。ケドゥーでも33年に栽培が始まり37年以降200パウに達したが、42年を最後に廃止され

た。しかし、ジャワ全体ではその後もこの栽培は拡大し、最終的には1865年に廃止された⁽⁴⁾。

Elson[1994: 79~81]によれば、ケドゥーにおける早期廃止の理由は農民の自由な乾季作煙草栽培が強制栽培の倍の収入をもたらしたからだというから、ここではこの時期にも従来からの栽培が盛んに行われていたことになる。この点について、バウト(J.C.Baud)総督代理から植民大臣に宛てられた1834年8月23日付け視察旅行報告書は「煙草はここではジャワ人の手で大量に栽培されているが、それはなお常にいわゆる中国煙草(Chineesche tabak)であり、ハバナ煙草、マニラ煙草の種子をもっと広めようとする政庁の試みは効果が上がっていない。首長達は前者の種類の方がより有利な結果をもたらすと主張している。人々はこの間、小規模に試験を続けてきている。」[Deventer 1866: 651~652]と述べている。ケドゥーではヨーロッパ市場向け外国種煙草の導入の試みが、在来種⁽⁵⁾の盛んな栽培の前に実を結ばなかったのである。

さらに1840年代末の状況については、Bleeker [1850-II: 222]に「ケドゥーの栽培は米と様々な果物を除くと、原住民消費用煙草、裏作として作られる様々な作物、コーヒー、茶、藍と砂糖の栽培である。…煙草は特にトゥマングン県と(マゲラン県) Probolinggo(郡)で作られる。ジャワ人は生産物を普通は華人に売るが、トゥマングンではシガーに製造もする。これは1000本当たり6~8ギルダーで販売される。スマランでは、このシガーが原住民によって大量に売られている。」という記述があり、ケドゥーでは盛んに栽培が行われていたことがわかる。

この頃には、ジャワ各地で内地市場向け煙草栽培が拡大しつつあった。K.V.[1852: 110]は「内地消費のための煙草の栽培は1852年を通じてかなり重要だったし、レンバン理事州における消費税(consumptie-regten)の増加から明らかに、年々

増えている。」と述べ、翌年にも「原住民市場向けの自由栽培は1853年にも再び重要であり、年々増えているものと推定される。」[K.V.1853: 167]と報告される。当時のケドゥー理事州とバゲレン理事州ルドック県(後のウォノソボ県)はレンバンなどとともに、この栽培の中心地だった[K.V.1854: 135]。この時期のケドゥーの生産高は5万~6万ピコルと推定されているが[K.V.1855: 109; K.V.1859: 145]、これは55年の強制栽培参加15企業(収穫合計1,637バウ)の合計収量が17,345ピコルだった[K.V.1855: 126]ことを考えれば、極めて多いといえよう。

1860年代にも、ケドゥーは栽培中心地の地位を占め続けた。K.V.[1864: 161]は「原住民市場向けのジャワ煙草の栽培は、特にレンバンとケドゥーで大規模に行われている。主として後者の理事州では、前年より生産はよく収穫はずっと良好だった。」と述べ、またK.V.[1869: 116]はケドゥーでは内地市場向け煙草の生産がヨーロッパ人企業家による「自由栽培」より重要であり、理事州北部の中心地Kadoe郡とLempoeijang郡のみで煙草の売り上げは100万ギルダーに達すると述べる。70年代に入ってもその重要性は変わらず、煙草は理事州からの重要な移出品[K.V.1871: 233]、煙草栽培は主要な生計手段の1つ[K.V.1872: 150]と言われた。他方、ルドック県の煙草もバゲレン理事州の重要移出品であり[K.V.1862: 240]、70年代前半には「ウォノソボ(Wonosobo)高地(Ledok)で煙草栽培はかなり大規模に、完全に栽培者自らの計算で行われ…全て原住民市場向け」[K.V.1874: 184]であり、それは特にルドック県で拡大していた[K.V.1875: 176]。

(3) 1874年以降の発展

1874年以降は各理事州の毎年の収穫面積データが得られる。表1はK.V.所収データ(1874~1915年)から理事州毎の5年平均の数値を算出したもの、表2はBagchus[1929: 42]及びK.V.所収の数字

表1 各時期煙草収穫面積 (バウ)

理事州	1874/79	1880/84	1885/89	1890/94	1895/00	1901/04	1905/09	1910/15
バンタム	6	5	2	11	24	42	34	136
クラワン	7	15	25	24	2	0	0	110
ブリアンゲル	3,570	4,241	6,614	4,621	8,095	10,428	15,223	14,078
チェリボン	200	356	542	583	834	1,013	1,111	1,200
テガル	389	631	646	1,059	1,421			
プカロンガン	604	488	615	656	700	2,609	3,469	6,096
スマラン	1,560	5,547	6,316	9,125	8,877	7,549	7,561	11,056
ジャバラ	554	606	425	464	585			
レンバン	12,899	14,590	18,928	23,059	21,195	25,949	26,740	29,467
スラバヤ	2,416	4,374	4,267	5,291	4,585	4,375	3,919	6,351
パスルアン	4,798	3,591	3,815	3,216	3,505	12,027	15,233	20,280
プロボリンゴ	1,824	3,279	4,318	3,202	3,008			
ブスキ	10,321	15,852	22,996	25,790	27,196	39,634	51,111	65,896
バニウワング	630	152						
バニュマス	6,854	8,852	13,045	11,534	17,164	13,780	15,453	17,545
バゲレン	3,352	6,047	5,561	7,041	8,469			
ケドゥー	8,435	9,289	12,758	15,748	13,895	25,118	30,667	44,025
マディウン	1,356	1,686	1,637	1,689	3,235	3,454	4,107	3,839
クディリ	5,622	7,806	9,983	9,293	9,888	10,698	12,554	8,483
マドゥラ	148	583	1,937	3,076	3,323	8,836	8,117	8,058
合計	65,534	87,899	114,442	125,582	135,799	165,804	192,027	236,261

表註：王侯領、私領地を除く。バニウワングは1882年にブスキに編入、1900年にテガルはプカロンガンに、
ジャバラはスマラン、プロボリンゴはパスルアン、バゲレンはケドゥーに編入。

出所：K.V.各年の数字から計算

表2 煙草収穫面積：1916～20年平均、1920～25年平均と1925～29年平均(バウ)

理事州	1916～20年			1920～25年			1925～29年	
	収穫面積	比率	対全耕地比%	収穫面積	比率	対全耕地比%	収穫面積	比率
バンタム	1	0.0	0.0	17	0.0	0.0	93	0.0
バタヴィア	187	0.1	0.0	377	0.2	0.0	518	0.2
チェリボン	1,423	1.0	0.3	2,224	1.2	0.5	2,210	1.0
ブリアンゲル	4,947	3.3	0.5	4,508	2.5	0.4	5,948	2.8
西ジャワ	6,558	4.4	0.3	7,126	3.9	0.3	8,769	4.1
プカロンガン	7,002	4.7	1.5	7,357	4.0	1.6	7,363	3.5
スマラン	9,643	6.5	1.2	9,053	4.9	1.1	9,641	4.6
レンバン	26,004	17.4	4.6	45,626	24.9	8.0	48,476	22.9
バニュマス	13,312	8.9	2.8	12,890	7.0	2.6	61,812	29.2
ケドゥー	32,509	21.8	5.3	31,286	17.1	5.0		
ジョクジャカルタ	3,759	2.5	2.1	3,442	1.9	2.0	n. a.	—
スラカルタ	4,341	2.9	0.7	5,318	2.9	0.8	n. a.	—
マディウン	3,331	2.2	0.6	5,873	3.2	1.0	7,888	3.7
中ジャワ	99,901	66.9	2.3	120,845	65.9	2.8	135,180	63.8
スラバヤ	4,808	3.2	0.9	6,186	3.4	1.1	8,033	3.8

マドゥラ	6,175	4.1	1.1	7,044	3.8	1.2	7,606	3.6
クディリ	9,081	6.1	1.7	10,395	5.7	1.9	12,349	5.8
パスルアン	11,567	7.7	1.8	12,155	6.6	1.8	13,606	6.4
ブスキ	11,270	7.5	2.7	19,522	10.7	3.8	29,616	14.0
東ジャワ	42,901	28.7	1.5	55,302	30.2	1.9	71,210	33.6
ジャワ・マドゥラ	149,360	100	1.5	183,273	100	1.8	211,857	100

出所：Bagchus1929:42、K.V.1929, bijl.T、K.V.1930, bijl.Sから計算

表3 ジャワ・マドゥラ理事州別住民煙草収穫面積(バウ)

理事州	1931~35年 平均	1936~40年 平均	理事州面積増減
バンテン	54(0.0)	45(0.0)	
バタヴィア	483(0.2)	430(0.2)	33年100.0km ² 減
バイテンゾルフ	561(0.3)	483(0.2)	
プリアンゲル	6,985(3.3)	7,801(3.8)	
チェリボン	2,465(1.2)	1,814(0.9)	
プカロンガン	5,583(2.6)	5,125(2.5)	
スマラン	10,666(5.0)	9,500(4.6)	33年44.1km ² 増
ジャバラ・レンバン	4,992(2.3)	4,639(2.2)	33年50.4km ² 減
パニユマス	12,623(5.9)	12,137(5.9)	36年791.8km ² 減
ケドゥー	37,886(17.7)	41,825(20.2)	33年6.2km ² 、36年791.7km ² 増
ジョクジャカルタ	6,018(2.8)	7,245(3.5)	
スラカルタ	7,124(3.3)	7,034(3.4)	
スラバヤ	2,852(1.3)	2,732(1.3)	35年768.6km ² 増
ボジョネゴロ	40,407(18.9)	37,658(18.2)	35年768.7km ² 減
マディウン	9,239(4.3)	10,446(5.1)	35年423.2km ² 増
クディリ	11,865(5.6)	10,058(4.9)	35年423.2km ² 減
マラン(プロボリンゴ)	13,892(6.5)	14,389(7.0)	33年併合
ブスキ	31,717(14.9)	19,949(9.7)	
マドゥラ	8,079(3.8)	13,393(6.5)	
合計	213,489(100)	206,703(100)	

出所：I.V.1932~1935：tabel 194、I.V.1936~1941：tabel 193より作成

から作成した1910年代後半と1920年代の一覧、表3はI.V.各年の数字による1930年代の統計である。これらの数値は、とりわけ表1の元になったデータの正確さに問題がないわけではなく、また時期によって行政区画が変化しているので絶対的な信頼を置くことはできないが、おおよその傾向を知るためには有効であろう。

これらから直ぐに読み取れるのは、ケドゥーはレンバン(30年代にはボジョネゴロ)、ブスキと並ぶジャワ最大の煙草生産地であることである。

次に収穫面積の増減について見ると、ジャワ・マドゥラ全体では煙草栽培は1910年代前半まで着実に発展したが10年代後半に激減し、20年代には回復傾向を示すが30年代には停滞しやや減少気味である。この数字にはヨーロッパ市場向け輸出用煙草も含まれるので、第一次大戦末期の船腹不足の影響を受けた10年代後半の激減は当然だった⁽⁶⁾。また30年代の停滞には世界恐慌の影響が考えられる⁽⁷⁾。他方、ケドゥーの場合(1900年まではバゲレンとの合計)も1910年代前半まで順調な発展を見

せ、10年代後半にはやはり減少している。しかしこれ以降は異なっており、20年代前半に回復が見られない反面、30年代にはむしろ生産を伸ばしているのが特徴である。

ケドゥーにおけるこうした動向の背景を全面的に検討することは本稿の範囲を越えているので次の課題にすることとし、以下ではケドゥー理事州内における地域差に着目して煙草栽培の発展の特色をいま少し検討してみたい。

2. 発展の地域的構造

(1) ケドゥー内の中心はどこか

ケドゥー内でも、煙草栽培は特定の地域に偏っていた。表4に示されるように、20世紀前半の栽培はマゲラン、トゥマングン、ウォノソボ3県に集中しているが、これらの地域ではそれ以前から栽培が盛んだった。19世紀の報告に当時のケドゥー理事州の主要煙草生産地として挙げられる郡はマゲラン県のProbolinggo[Bleeker 1850-II: 222; K.V.1862: 182; K.V.1869: 116]、Remameh[K.V.1869: 116]、トゥマングン県のKadoe(後のParakan郡にほぼ相当)[K.V.1862: 182; K.V.1869: 116]、Lempoeijang[K.V.1862: 182; K.V.1869: 116]である。マゲラン県とトゥマングン県とを表4から比較

表4 ケドゥー理事州各郡・県煙草栽培面積(バウ)と対耕地比(%)

郡・県	M.W.調査1903年		1916~20年平均		1920~25年平均	
	収穫面積	対耕地比	収穫面積	対耕地比	収穫面積	対耕地比
Magelang	823	5.7	626	7.5	614	5.8
Bandongan	1,905	9.1	1,356	7.0	1,741	8.7
Tegalredjo	1,445	6.5	985	5.7	922	5.1
Grabag	336	1.8	1,090	6.1	849	4.8
Moentilan	2,063	8.1	2,677	10.9	2,755	11.2
Salam	125	1.0	759	5.2	1,131	7.9
Salaman	483	1.6	808	2.6	1,079	3.1
マゲラン県	7,180	5.0	8,301	6.2	9,091	6.5
Temangoeng	2,035	9.1	2,360	21.1	2,775	24.6
Kaloran	547	2.8	241	1.0	182	0.9
Pringsoerat	164	0.9	424	2.9	279	1.8
Parakan	3,265	16.9	5,726	22.0	4,715	18.2
Tjandiroto	2,556	14.9	2,739	11.6	2,608	10.8
トゥマングン県	8,567	8.8	11,490	11.4	10,559	10.8
Poerworedio		0.0	20	0.1	10	0.1
Loano	56	0.3	3	—	—	0.0
Tjangkrep	75	0.3	40	0.2	68	0.3
Koetoardjo	188	1.5	16	0.1	13	0.1
Kemiri	99	0.8	107	0.8	91	0.6
Pitoeroeh	635	6.1	329	2.4	527	3.9
Poerwodadi	10	0.1	2	—	4	0.0
ブルウォレジョ県	1,063	1.0	517	0.4	713	0.6
Keboemen	122	1.1	801	6.5	96	0.8
Alihan	350	1.8	380	1.8	591	2.8
Koetowinangoen	68	0.5	329	2.2	475	3.2
Premboen	118	0.7	389	3.1	515	3.0
Karanganjar	67	0.5	49	0.3	142	0.9

Gombong	38	0.3	33	0.2	58	0.4
Rowokele	0	0.0	34	0.2	26	0.2
Pedjagoan	29	0.2	44	0.2	56	0.3
Poering	55	0.4	30	0.2	86	0.5
クブメン県	847	0.6	2,089	1.5	2,045	1.4
Wonosobo	950	5.4	1,404	11.0	1,012	7.3
Garoeng	4,000	13.2	6,005	29.6	5,532	29.1
Leksono	780	3.1	1,335	7.3	1,258	6.3
Sapoeran	950	3.9	1,255	5.8	989	4.5
Broeno	10	0.1	55	0.3	13	0.1
Ngadisono	110	0.6	58	0.2	74	0.3
ウォノソボ県	6,800	5.1	10,112	8.8	8,878	7.6
ケドゥー理事州	24,456	4.0	32,509	5.3	31,286	5.0

表註：行政区画は1920年段階のもので、30年代初とは異なってクトアルジョ県はなく、そこに属する郡はクブメン県に含まれている。また、表示のRowokele郡はM.W.段階ではBanjoemodal、Ngadisono郡はKaliwiroと同一だとして作成した。耕地面積は1920年数値。

出所：Landbouwatlas 1926：Staat I, III； Bagchus 1929：123； M.W.L.Kedoe bijl.2

すると後者の方が栽培が盛んだが、19世紀段階でも同様だった。1870年代初めには「煙草栽培は1872年非常に重要だったが、それは特にトゥマンゲン県でそうだった。」[K.V.1873: 204]、「原住民市場向け煙草の栽培は、今年もトゥマンゲン県で最も重要だった。」[K.V.1874: 184]といわれる。そして、Temangoengの町は理事州内最大の煙草取引場所だった[K.V.1890: bijl.NNN]。

他方、旧バグレン理事州に属したウォノソボ県も、既に述べたように19世紀半ばには内地市場向け煙草栽培の中心地であり、その移出は特にKalialang郡で大きな意味があった[K.V.1862: 240]。また70年代前半にはかなり大規模に栽培が行われていたウォノソボ高地に加え、シンドロ(Sindoro)山(Kalialang郡⁸⁾、さらに南でスンピン(Soeming)山とタワン(Tawan)山の麓近くに位置するLeksono郡でも「この作物の栽培に非常に適した土壌が見られる」[K.V.1874: 184]と報告される。これ以降、K.V.にはこの地域の栽培の盛んな様子がしばしば描かれるが、ここで生産された煙草はバグレン理事州(当時)北部の最重要商品の1つであり[K.V.1891: bijl.PPP]、ウォノソボの

町に立つ定期市で取引され各地へ移出され[K.V.1892: 198]、ボルネオからさえ買付けに来たという[K.V.1891: 204]。

1900年代のこれら3県での栽培について見ると、K.V.[1905: 232]は「高価格の結果、煙草栽培は…ケドゥー(マゲラン県)で拡大した。ケドゥー理事州のウォノソボ、トゥマンゲン県では栽培拡大は不可能だったが、それはこれに適した土地は既に全て利用されているからである。」と述べ、K.V.[1906: 226]によればマゲラン県では翌年もMoentilan監督官管区で栽培拡大が進み、1908年には「ケドゥーでもほぼ全ての土地が既に利用されている」[K.V.1909: 237]という状態に至った。また1910年には「トゥマンゲン県、ウォノソボ県、マゲラン県では、煙草栽培は既に拡大がもう問題にならないほどの規模で行われている」[K.V.1911: 204~206]と述べられる。これらの地域では煙草栽培が拡大し、それに適した土地がほぼ1900年代には利用され尽くしたと考えることができる。

このように、ケドゥーの煙草栽培は既に19世紀中葉には3県に、それも特定の郡に集中していた。行政区画がたびたび変更され名前も変わっている

ので軽々には結論できないが、それ以降栽培中心地は植民地期末まで変わらなかったと思われる。

3. 水田作煙草と畑作煙草

それではこの地域では、どのような土地に何時煙草が栽培されたのであろうか。また、それは歴史的に変化が見られたのであろうか。

この点についての情報を与えてくれる最も早い時期の史料は、管見の限り先に引いた19世紀初のRaffles[1817: 134~135]、Crawfurd[1820, vol.1: 406~409]であり、それによると旧ケドゥーでは煙草は乾地でも作られたが水田乾季作(6~10月)が主流だった。その後、1873年までの間、栽培地と栽培時期を明確に示した史料は得られなかったが、煙草の強制栽培が水田で展開された⁽⁹⁾ことを考えると、当初はやはり水田作が中心だった可能性が強い。

1874年以降は各耕地毎の収穫面積データがK.V.から得られるので、各時期の平均を表5~表7にまとめた。先ず表5から明らかに旧ケドゥー地域では1880年代前半を例外として水田裏作が相対的に多く、これが主流だったことがわかる。もっとも畑作面積もかなりに上り、ラッフルズの観察と比較すると、19世紀前半から半ば以降に煙草の畑

作が拡大してきたと考えられる。

この地域では1903年の福祉減退調査によれば、煙草はマゲラン県で商品作物として意味が大きく、県全域で低地でも山麓でも水田と畑で栽培される。他方、トゥマングン県でも極めて大きな意味を持ち、やはり水田にも畑地にも作られていた[M.W.L. Kedoe 213]。

さらに1923年の調査によると、水田栽培が行われるのは両県の高度の低い山間部で、マゲラン県ではMoentilan郡が最も重要であり、トゥマングン県ではTemanggoeng、Parakan、Tjandiroto郡が主要郡だった[Fruin 1923a: 268~269]。トゥマングン県では大半の栽培が水田裏作として行われるが[Fruin 1923b: 300~301]、マゲラン県ではスンピン山の傾斜地に向かうBandongan郡の高地山間デサにおける畑地での栽培、またこれよりは劣るがTegalredjo郡、Grabag郡のメラピ(Merapi)山麓の山間デサでの畑地栽培も重要だった[Fruin 1923b: 309~310]。また30年代にもHeijden[1935: 564]が水田作と畑作の立地に関する同様の報告をしている。

こうしてみると、旧ケドゥー地域では煙草栽培は高度の低い山間部で水田乾季作として始まり、その後に高度の高い傾斜地の畑作が拡大してきた

表5 旧ケドゥーにおける煙草収穫面積の推移

年平均	水 田			畑 地			合 計			
	第1作物	第2作物	合 計	第1作物	第2作物	合 計	第1作物	第2作物	合 計	
1874	パウ	48	5,190	5,237	984	2,213	3,197	1,032	7,402	8,435
~79	%	0.6	61.5	62.1	11.7	26.2	37.9	12.2	87.8	100.0
1880	パウ	0	3,849	3,849	5,337	103	5,440	5,337	3,952	9,289
~84	%	0.0	41.4	41.4	57.5	1.1	58.6	57.5	42.5	100.0
1885	パウ	5	8,719	8,724	3,829	205	4,035	3,834	8,924	12,758
~89	%	0.0	68.3	68.4	30.0	1.6	31.6	30.1	69.9	100.0
1890	パウ	565	7,416	7,981	5,665	2,103	7,768	6,229	9,519	15,748
	%	3.6	47.1	50.7	36.0	13.4	49.3	39.6	60.4	100.0
1895	パウ	773	7,645	8,418	4,245	1,352	5,596	5,018	8,997	14,015
~99	%	5.5	54.5	60.1	30.3	9.6	39.9	35.8	64.2	100.0

表註:「第1作物」は1st gewas、「第2作物」は2de gewasの訳。

出所: K.V.各年記事より作成

表6-1 旧バゲレンにおける煙草収穫面積の推移

年平均		水 田			畑 地			合 計		
		第1作物	第2作物	合 計	第1作物	第2作物	合 計	第1作物	第2作物	合 計
1874	バウ	124	1,004	1,128	1,446	778	2,224	1,569	1,783	3,352
~79	%	3.7	30.0	33.7	43.1	23.2	66.3	46.8	53.2	100.0
1880	バウ	159	1,354	1,514	2,530	2,003	4,533	2,690	3,357	6,047
~84	%	2.6	22.4	25.0	41.8	33.1	75.0	44.5	55.5	100.0
1885	バウ	15	910	925	4,270	365	4,636	4,286	1,275	5,561
~89	%	0.3	16.4	16.6	76.8	6.6	83.4	77.1	22.9	100.0
1890	バウ	98	1,295	1,393	4,630	1,014	5,643	4,727	2,308	7,035
~94	%	1.4	18.4	19.8	65.8	14.4	80.2	67.2	32.8	100.0
1895	バウ	175	1,622	1,797	5,966	824	6,790	6,142	2,445	8,586
~99	%	2.0	18.9	20.9	69.5	9.6	79.1	71.5	28.5	100.0

表註：表作は1st egewas、裏作は2de gewasの訳
出所：K.V.各年記事より作成

と考えられる。

他方、旧バゲレン理事州に属したウォノソボ県に関する最も早い時期の記述は、管見の限り1873年に関する記事でありウォノソボ高地(Ledok:後のウォノソボ県)での栽培面積は約1,880バウ、このうち水田栽培は97バウ[K.V.1874: 184]だということから、ここでは95%が畑地で栽培されていたことになる。次に1874~9年の状況を表6-1から見よう。

旧バゲレン理事州はプルウォレジョ、クトアルジョ、ルドック、クブメン、カラニアニャルの5県から構成されていたが、先に見た表4の数値から判断する限り、ルドックすなわち後のウォノソボ県以外では煙草栽培は盛んでないの、表6-1の面積の大半はウォノソボ県に関わると判断できる。ここでは一貫して畑作が主力だった。

次に福祉減退調査によると、ウォノソボ県の水田では稲収穫後にトウモロコシを作るのが一般的であり、煙草を作るのは若干の農民だけが、畑地では煙草とトウモロコシが主要作物であり、畝を立ててそこに煙草を、溝にトウモロコシを植えるのが普通だという[M.W.L.Kedoe 188]。また1923年の報告では、ウォノソボ県の煙草栽培中心地であるGaroeng郡Kedjadjar副郡、Leksono郡

表6-2 ウォノソボ県煙草栽培面積（バウ）

年	畑 地	比率	水田	比率	合 計
1931	10,761	90.4	1,146	9.6	11,907
1932	11,247	91.6	1,034	8.4	12,281
1933	11,077	91.7	1,000	8.3	12,077
1934	9,581	92.0	833	8.0	10,414
1935	10,439	88.9	1,299	11.1	11,738

Watoemalang副郡などでは畑作煙草しか栽培されていないという[Fruin1923a: 268~269]。さらに1935年にもGaroeng郡やシンドロ山、スンビン山傾斜地沿いの高い位置にあるデサでは煙草がほぼ全て畑地に栽培され、県全体で約90%が畑作だと報告される[Heijden 1935: 564]。同報告が掲げる同県の30年代の耕地別栽培面積(バウ)は表6-2の通りで、一貫して畑作比率が圧倒的だったことが示される。

なぜこのように畑作煙草が圧倒的だったかの理由はこの地域の農業全体の中で検討しなければならないが、さし当たりこの地域が理事州内で最も水田が少なく、畑地が卓越した所であることを挙げておこう。M.W.L.[Kedoe bijl.1]によると1903年現在の水田面積の対耕地面積比は理事州全体が51.44%、マグララン県55.38%、トゥマングン県49.32%、プルウォレジョ県53.55%、クブメン県

表7 ケドゥー理事州における煙草収穫面積の推移

年平均		水 田			畑 作			合 計		
		第1作物	第2作物	合 計	第1作物	第2作物	合 計	第1作物	第2作物	合 計
1874	パウ	171	6,194	6,365	2,430	2,991	5,421	2,602	9,185	11,787
~79	%	1.5	52.5	54.0	20.6	25.4	46.0	22.1	77.9	100
1880	パウ	159	5,203	5,362	7,868	2,105	9,973	8,027	7,309	15,336
~84	%	1.0	33.9	35.0	51.3	13.7	65.0	52.3	47.7	100
1885	パウ	21	9,629	9,650	8,100	571	8,671	8,120	10,200	18,320
~89	%	0.1	52.6	52.7	44.2	3.1	47.3	44.3	55.7	100
1890	パウ	663	8,711	9,374	10,294	3,116	13,410	10,956	11,827	22,783
~94	%	2.9	38.2	41.1	45.2	13.7	58.9	48.1	51.9	100
1895	パウ	949	9,458	10,407	10,210	3,026	13,236	11,159	12,484	23,643
~99	%	4.0	40.0	44.0	43.2	12.8	56.0	47.2	52.8	100
1900	パウ	629	11,002	11,631	9,264	3,436	12,700	9,892	14,437	24,329
~04	%	2.6	45.2	47.8	38.1	14.1	52.2	40.7	59.3	100
1905	パウ	828	14,087	14,915	8,521	7,220	15,741	9,350	21,306	30,656
~09	%	2.7	46.0	48.7	27.8	23.6	51.3	30.5	69.5	100
1910	パウ	1,550	12,750	14,300	24,651	5,075	29,726	26,200	17,825	44,025
~15	%	3.5	29.0	32.5	56.0	11.5	67.5	59.5	40.5	100

出所：K.V.各年記事より作成

63.62%に対して、31.72%でしかなかった。

最後に20世紀に旧ケドゥーと旧バゲレンが合併して成立したケドゥー理事州の煙草収穫面積を、表7から見ておこう。ここからは栽培は水田では第2作物、畑地では第1作物が主力であり、水田作も拡大はしたがその伸びは小さいのに対して、畑作の拡大が著しいこと、とりわけ1910年代前半の2倍近い拡大がこの時期の収穫面積拡大の全てを占めていることが目につく。

それではこれらの栽培はどのように行われ、如何なる原因によってこのような拡大の違いが生じたのであろうか。以下では章を改めて、栽培の特徴を検討する中でこの問題を考えてみたい。

第2章 ケドゥーにおける煙草栽培・加工の特徴

1. 19世紀初めの煙草栽培・加工

まず栽培・加工の具体的な様子に関する史料が得られる最も早い時期である、19世紀初めの煙草

栽培の特徴を見よう。Raffles[1817: 134~135]は「ケドゥーでは…土壌がこれに適しているので、それは予め肥料を施していない土地で8~10フィートの高さにまで生育するが、東インドでは滅多に見られない繁茂振りである。ここでは米と輪作され、年間に採れるのはそれぞれ1回ずつである。ただし、米の収穫後、あるいは煙草の葉の取入れ後には、土地は次の作物を受け入れる準備をするための時期が再びやって来るまで休閑する。若い苗はこの地域内では栽培されず、周辺の高地から供給される。すなわちディエン(Dieng)高原、あるいはプラウ(Prahu)山の山麓のカリ・ベベル(Kali-beber)地方(district)から供給されるが、ここでは苗が栽培され、周辺地域の栽培者に大量に売られる。移植は6月に行われ、10月には完全に生長する。」と述べている。またCrawford[1820, vol.1: 406~409]もほぼ同様の点を指摘し、さらに煙草は「高地にある一般の耕地でも、人工灌漑によって米が作られる土地でも栽培される」が、「収量が最も多く、危険が最も少なく、最も良質の煙

草が採れるのは、後者での栽培である」という。また「煙草は6～8フィートの高さになるまで育てられ、それより丈が大きくなることを先端を摘み取ることで防ぐが、それは葉を広げるためである。収穫は先ず下の方の粗悪な葉から始められ、小さくより華奢な一番上の葉で終わる」ことも指摘している。収穫された煙草は、「葉を繊維状の主軸から切り離した後、常に緑のまま刻まれる」とあり、ケルフ煙草に加工されていた。

ここからわかるのは、(a)先に既に触れたが、煙草栽培は水田乾季作(6～10月)が主流であること、(b)毎年、米と輪作すること、(c)高地で育てられた苗を購入して移植していたこと、(d)無肥であること、(e)先端摘みが行われていること、(f)収穫は葉毎に、最下層の粗悪葉から始めて上の葉へと進むこと、(g)加工の際、葉を主軸から切り離してから刻むことである。

それでは、このような特徴はそれ以降、どのように継承されたのであろうか。以下では、主として1920年代前半の調査報告から水田作の中心地としてトゥマングン県とマゲラン県(特にMoentilan

郡)、畑作煙草の中心地としてウォノソボ県Garoeng郡(特にKedjadar副郡)の事例を取り上げて、検討したい。

2. 20世紀の煙草栽培

(1) 輪作

先ず、栽培時期を見ておこう。表8はケドゥー理事州と煙草3県の月別煙草作付け面積、表9は同収穫面積の1920～25年平均、表10、表11は同じ数字を煙草栽培が耕地の10%を越える煙草5郡について表したものである。

これらから明らかなように、何れの場所でも煙草は乾季に大半の作付け、雨季に大半の収穫が行われる。ただ、もう少し細かく見ると水田作が卓越するマゲラン県、トゥマングン県、郡別に見るとTemangoeng、Parakan、Moentilan、Tjandiroto郡では畑作地帯に比べ1ヶ月あまりスケジュールが遅い。これは「水田煙草は、稲の収穫が終了してから初めて植えるので畑作煙草より数ヶ月遅れる」[Fruin 1923a: 318]ためである⁽¹⁰⁾。

水田での輪作方式をトゥマングン県の例で見る

表8 月別煙草作付け面積(1920～25年平均、バウ)

	ケドゥー理事州		マゲラン県		トゥマングン県		ウォノソボ県	
1月	356	1.1	157	1.7	—	0.0	162	1.8
2月	1,037	3.3	285	3.2	—	0.0	750	8.4
3月	2,752	8.7	421	4.7	52	0.5	2,274	25.3
4月	4,862	15.4	518	5.8	1,156	10.8	3,173	35.3
5月	5,555	17.6	615	6.8	3,088	28.9	1,498	16.7
6月	7,628	24.2	2,254	25.0	3,353	31.4	728	8.1
7月	6,045	19.2	3,081	34.2	1,970	18.4	235	2.6
8月	2,251	7.1	1,145	12.7	787	7.4	43	0.5
9月	702	2.2	346	3.8	211	2.0	16	0.2
10月	102	0.3	72	0.8	13	0.1	4	0.0
11月	51	0.2	17	0.2	26	0.2	5	0.1
12月	217	0.7	89	1.0	36	0.3	88	1.0
雨季	4,515	14.3	1,041	11.6	127	1.2	3,283	36.6
乾季	27,043	85.7	7,959	88.4	10,565	98.8	5,693	63.4
合計	31,558	100	9,000	100	10,692	100	8,976	100

出所：Bagchus 1929：254～257より計算

表9 月別煙草收穫面積(1920~25年平均、バウ)

	ケドゥー理事州		マゲラン県		トゥマングン県		ウォノゾボ県	
1月	1,291	4.1	489	5.4	702	6.6	84	1.0
2月	188	0.6	17	0.2	112	1.1	40	0.5
3月	14	0.0	3	0.0	2	0.0	8	0.1
4月	6	0.0	3	0.0	—	0.0	—	0.0
5月	38	0.1	19	0.2	—	0.0	14	0.2
6月	302	1.0	159	1.7	—	0.0	128	1.5
7月	650	2.1	268	2.9	2	0.0	270	3.1
8月	1,691	5.4	597	6.6	32	0.3	845	9.6
9月	4,748	15.2	783	8.6	328	3.1	2,763	31.3
10月	7,734	24.8	1,451	16.0	2,612	24.7	2,661	30.1
11月	9,428	30.2	3,443	37.9	3,972	37.6	1,713	19.4
12月	5,080	16.3	1,857	20.4	2,797	26.5	328	3.7
雨季	23,735	76.1	7,260	79.9	10,197	96.6	4,834	54.8
乾季	7,435	23.9	1,829	20.1	362	3.4	3,992	45.2
合計	31,170	100	9,089	100	10,559	100	8,826	100

出所：Bagchus 1929：254~257より計算

表10 ケドゥー煙草5郡の月別煙草作付面積(1920~25年平均、バウ)

	Garoeng 畑作		Temanggoeng 水田作		Parakan 水田作		Moentilan 水田作		Tjandiroto 水田作	
耕地比	29.1%		24.6%		18.2%		11.2%		10.8%	
1月	29	0.5	—	0.0	—	0.0	—	0.0	34	1.3
2月	370	6.6	—	0.0	—	0.0	—	0.0	—	0.0
3月	1,389	24.9	—	0.0	14	0.3	—	0.0	38	1.4
4月	2,271	40.7	165	5.9	294	6.2	10	0.4	688	25.4
5月	882	15.8	772	27.4	1,312	27.5	80	2.9	938	34.6
6月	428	7.7	639	22.7	1,813	38.0	798	29.1	774	28.6
7月	129	2.3	791	28.1	902	18.9	1,281	46.7	153	5.6
8月	15	0.3	389	13.8	302	6.3	450	16.4	33	1.2
9月	7	0.1	59	2.1	99	2.1	84	3.1	14	0.5
10月	3	0.1	—	0.0	4	0.1	41	1.5	2	0.1
11月	—	0.0	—	0.0	23	0.5	—	0.0	1	0.0
12月	51	0.9	—	0.0	3	0.1	1	0.0	33	1.2
雨季	1,842	33.0	—	0.0	44	0.9	42	1.5	108	4.0
乾季	3,732	67.0	2,815	100.0	4,722	99.1	2,703	98.5	2,600	96.0
合計	5,574	100	2,815	100	4,766	100	2,745	100	2,708	100

出所：Bagchus 1929：254~257より計算

と、煙草は一般にジャワ稲(padi-djawa：晩稲)の後に作られ、「ジャワ稲→煙草→クレテック稲(padi-kretek：早稲)やジャワ稲」という順番になる。移植時期は5~7月、収穫は10~12月が普通

である。しかし、煙草は毎年作られるのではなく、良質の水田でも2年1作より頻繁にはならなかった[Fruin 1923a: 300~301]⁽¹¹⁾。

次に畑地での輪作をKedjar副郡の事例から

表11 ケドゥー煙草5郡の月別煙草収穫面積(1920~25年平均、バウ)

耕地比	Garoeng 畑作		Temanggoeng 水田作		Parakan 水田作		Moentilan 水田作		Tjandiroto 水田作	
	29.1%		24.6%		18.2%		11.2%		10.8%	
1月	57	1.0	355	12.8	242	5.1	76	2.8	50	1.9
2月	3	0.1	49	1.8	20	0.4	—	0.0	—	0.0
3月	7	0.1	—	0.0	—	0.0	—	0.0	—	0.0
4月	—	0.0	—	0.0	—	0.0	—	0.0	—	0.0
5月	2	0.0	—	0.0	—	0.0	—	0.0	—	0.0
6月	—	0.0	—	0.0	—	0.0	—	0.0	—	0.0
7月	5	0.1	—	0.0	—	0.0	2	0.1	—	0.0
8月	247	4.5	—	0.0	3	0.1	13	0.5	28	1.1
9月	1,892	34.3	66	2.4	127	2.7	73	2.6	113	4.3
10月	1,989	36.1	508	18.3	1,084	23.0	495	18.0	971	37.2
11月	1,055	19.2	1,081	39.0	1,919	40.7	1,496	54.3	829	31.8
12月	252	4.6	716	25.8	1,320	28.0	600	21.8	617	23.7
雨季	3,363	61.0	2,709	97.6	4,585	97.2	2,667	96.8	2,467	94.6
乾季	2,146	39.0	66	2.4	130	2.8	88	3.2	141	5.4
合計	5,509	100	2,775	100	4,715	100	2,755	100	2,608	100

出所：Bagchus 1929：254~257より計算

見よう。この副郡は高度の高い傾斜地に位置するが雨季に豪雨がない、朝霧が立つなど煙草栽培に好都合な気候条件に恵まれていた [Verslag Garoeng 1906: 511~512]。耕地はほとんどが畑地で(1910年現在の面積は畑地7,675バウ、水田146バウ)、煙草は全て畑作で1920年代初めの年間栽培面積は3,000バウに上った。しかし畑地の大半は石ころだらけで傾斜が急なので、煙草を毎年作ることができるのは約800バウの灌漑可能な畑地だけで、それ以外の土地での栽培は1年おき、2年おきだった [Fruin 1923a: 269~270]⁽¹²⁾。

このような最良地はデサTieng、Kedjar、Serang、Tambiなどに見られ、そこでは煙草は毎年4月、5月に移植して9月、10月に収穫が終るが、収穫終了前にトウモロコシを煙草の間に蒔くのが普通であり、高度の高い畑では収穫開始以前の場合さえあった⁽¹³⁾。煙草収穫が終わってしばらくすると、トウモロコシが植わっている土地へ灌水した。

このトウモロコシは自家消費で、この地域で

は最も重要な主食だった。また最良地では煙草とトウモロコシの他に、販売用に野菜やジャガイモが間作された。デサKedjarの例では、ジャガイモから始め、それがまだ小さいうちに煙草を植え、ジャガイモを掘り上げた後、トウモロコシを煙草の間に播いた。

これに対して灌漑のできない畑地の場合には、ある年に煙草とトウモロコシを作ると、翌年には休閑された [Fruin 1923a: 271~272]。

以上のように煙草は乾季に栽培され、水田では水稻、畑地ではトウモロコシという主要な食糧作物と輪作されるのが一般的だった。もっとも水田、畑地を問わず、ごく一部の条件に恵まれた土地を除いて、同じ土地に煙草を毎年作るわけではなかった。

(2) 苗

移植される苗は、1920年代初めのトゥマングン県やマゲラン県の栽培では基本的にはディエンなどの高地から取り寄せていた [Fruin 1923a: 269~270, 301~302]⁽¹⁴⁾。これらの地域は1900年代前

半にもディエン産苗を購入していたが、M.W.L [Kedoe 191]によればそれは質のよさで知られ、収量が多く病気にも強かったからだという。

他方、ディエン高地に位置するKedjadjar副郡の場合には、当然苗は地元で育てられる。ここでは1～2月に苗床を造成し、自家製種子を播き竹やアランアランで作った日覆いをかける。移植は約70日後である。苗床にはしばしば肥料が施された。作業は全て家族労働で行われ、必要な資材も自給したので、現金支出はなかった[Fruin 1923a: 275]。この地域では自家栽培用苗だけでなく、先に挙げた2地方向けに販売する苗も専門的に栽培していたが、苗販売先での移植時期が稲収穫後になり遅かったので、前者に比べ播種時期は遅かった[Fruin 1923b: 361]⁽¹⁵⁾。

(3) 煙草栽培のプロセス

次に煙草栽培のプロセスを順を追って検討していこう。

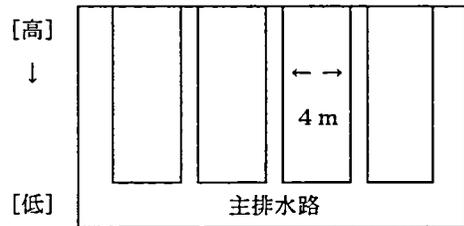
【耕地準備】

煙草栽培にとって過剰な水分は敵であり、水田栽培の場合には排水に特に注意が払われる。Stenvers[1915: 10～11]によると、このためにしばしば図のような主排水路(djagangan ngoenbeng)を土地の最も低い位置に掘ることから作業が開始される。次に耕地上にほぼ4 m間隔で溝(sidattan)が傾斜の方向に合わせて掘られる。その深さは土壌の状態によって異なり、主排水路よりは浅いが60cm以上はある。溝掘りのあと稲藁が刈り取られ、その切り株は犁(ploeg)で反転され、犁でできない所は鋤(patjol)で耕される。

この後、土地耕起が行われる。トゥマングン県の水田は鋤を使って3～4回耕されるが、作業には賃労働が使用され、バウ当たりの経費は調査デサのModjotengahでは45～50ギルダー、Gembjangでは45.5～46.5ギルダーだった[Fruin 1923a: 303]。

他方、マゲラン県Moentilan郡では犁とハロー

図



(eg)が使われるが、畦の仕上げ、環状水路と床作りには鋤を用いた。この地域はトゥマングンに比べ水害を受けやすく、土地の排水・乾燥にはよりしっかりと注意を払わねばならない⁽¹⁶⁾。だから煙草苗はトゥマングンでなされるように田面に直植えるのではなく、表層土を床に集め、それを後にもう一度鋤で耕して畝を立てて植える⁽¹⁷⁾。このようにここでは細かい作業が必要だったので経費も高く、バウ当たり60～70ギルダーに達した。当然、このような重い経費負担に見合う収穫が期待できるのは良質地だけであり、水の害が少ない場所では作業を省略して経費を20～30ギルダーに抑えていた[Fruin 1923a: 310; Fruin 1923b: 362～363]。

これに対してKedjadjar副郡の畑作では、上のような排水対策は不要である。ここでは移植前、本畑は鋤で深耕(45～75cm)される。この作業(tilepと呼ばれる)には他人労働が使われ、数週間かかる。もっとも全ての土地で同時に作業するわけではないので、デサKoelipanでは1バウに満たない土地しか持たない農民は、この作業を家族労働か、若干名のサンバタン(sambatan: 相互扶助)によって行う。しかし、デサKedjadjarの良質な灌漑畑地では、サンバタンだと土地がきちんと耕起されないという理由からこの作業は大半が賃労働で行われ、バウ当たりの経費は50ギルダーに達する。ただ、このデサでも劣等地の場合には耕起の深さも15cm程度と浅く、家族労働かサンバタン、もしくはラヤット⁽¹⁸⁾の助けを借りて作業が行われた[Fruin 1923a: 275]⁽¹⁹⁾。

【移植】

耕地準備が終わると移植が行われる。ケドゥーでは穴空け棒で植え穴を空け、1つの穴に苗1本を植えるのが普通だった。植え穴への施肥は水田の場合、トゥマングン県では行われないがMoentilan郡では行われる。畑地の場合には、トゥマングンでもKedjadjar副郡でも肥料が施される⁽²⁰⁾。用いられるのは厩肥を主体にした堆肥で、たいていは自ら飼育する馬、山羊などの家畜から採られたが、販売されるものを購入する場合もあった⁽²¹⁾。

Kedjadjarなどでは厩肥に対する需要が多かった結果、家畜は他地域とは対照的に厩舎で飼われるのが一般的だった⁽²²⁾。このため、1920年代初には草刈り仕事を行う若者が年12.50ギルダールの賃金による請負制で雇用された。施肥の量は主に農民の家畜飼育規模にかかっていたが、農民の経済状況によっても異なり、例えばデサKedjadjarでは一般に1バウに50～60担(mansvracht)を施すが、富裕農民は200担使用した[Fruin 1923a: 272～273, 276, 302, 310]。

移植作業は、トゥマングン県ではサンバタンによって30～40名の手で午後に行われるのが普通で、経費は10ギルダールほどだった[Fruin 1923a: 303]。対照的にKedjadjar副郡の場合は、他人労働を使わないのが一般的だった[Fruin 1923a: 272～273, 276]⁽²³⁾。

【維持管理作業】

移植後、作物の維持管理のために様々な作業が行われたが、その中で特に労働力を大量に要するのが除草(matoen)である。トゥマングン県では一般に3回行われるが、デサGembjangでは水田と灌漑可能な畑地の場合には4回行われ、経費は約55ギルダール(灌漑できない畑地ではその半分)必要だった[Fruin 1923a: 302～303]。他方、Kedjadjar副郡デサKedjadjarの畑地栽培では、除草は月1回、合計5回程度行われた⁽²⁴⁾。作業は女性の手で

午前中に行われ、費用はバウ当たり46～47ギルダールとなる。またデサKoeripanでは4回実施され、年間経費はバウ当たり50ギルダールだった。ただ、1バウより少ない土地を耕す者は、大半の労働を家族労働で行っていた[Fruin 1923a: 276]。

この他、補植、土寄せ⁽²⁵⁾、最下層の砂葉(zandbladeren)の除去(ngrampel: この葉はクロソックとして売られるか、クロソック価格が低すぎる場合には捨てられる)、先端の摘み取り(moenggel: 種子の形成を防いで煙草をより強いものにするために行われる)、脇芽の摘み取り(mritil)⁽²⁶⁾などが行われたが、いずれも労力をそれほど要する作業でなく、家族労働で行われるのが普通だった[Fruin 1923a: 276, 303～304; 1923b: 363～364]⁽²⁷⁾。

【収穫】

収穫は全部一度に行うのではなく、先ず最も質が悪い最下層の葉を摘み取り、その後、徐々に上層の良質な葉を収穫するのが普通だった。収穫開始時期は高度によって異なり、比較的低位のMoentilan郡では移植後100日前後、山間部のParakan郡やToemangoeng郡では約4ヶ月後だった[Stenvers 1915: 16]。収穫終了までにMoentilan郡やトゥマングン県では約2ヶ月、Kedjadjar副郡では数ヶ月を要した[Fruin 1923a: 271～272, 303～304, 311]⁽²⁸⁾。

収穫の担い手について史料に明確な記述があるのはトゥマングン県に関してのみであり、「摘葉も普通は自分でやる。大土地占有者は摘葉と輸送をボロンガン(出来高払い)で行うが、これはバウ当たり15ギルダールになる。」[Fruin 1923a: 304]とある。ここから判断すると、1バウ程度の栽培の場合は収穫は家族労働だけで十分に行うことができ、それを越えるような規模の経営だけが賃労働を使用したと考えられる。

収穫される煙草葉は各層毎に異なる名称を持ち、その用途も異なっていた。その分類は地域や史料

によって多様であり、全てを紹介することは不可能なので、ここでは3つだけ挙げておきたい。

第1はFruin[1923b: 364]の分類であり、最も一般的には「最下層の価値が最も小さい葉を ampadan と呼び、真ん中の葉を tengahan、rampasan、最上層の葉を tjengkrik (Batoer)、tjelingkrik (Kedjadar)、kepala (Moentilan) と呼ぶ。oeroetan というのは、Batoer と Kedjadar で ampadan よりはやや良質だがそれでも価値が低い葉の名称である。しかし逆にトゥマングンでは、またレンバンでもそうらしいが、この名称は最良の質を指す」という。

第2はやはり Fruin[1923a: 277~278]が報告している Kedjadar 副郡のデサ Kedjadar とデサ Koeripan における分類であり、まとめれば表12のようになる。

第3はStenvers[1915: 16]が観察した水田栽培

地域での区別であり、表13にまとめた。

このように各地で4~6段階に分類されているが Tabak[1925: 73~74]や Heijden[1935: 588]によれば実際には3種類程度に大まかに分けて収穫することが多かったという⁽²⁹⁾。

3. 煙草の内地市場向け加工

内地市場向け煙草の加工は、(1)発酵、(2)刻み、(3)乾燥・熟成からなる。これらのうち、製造する煙草がペペアン煙草(pepean: 天日乾燥)か ガランガン煙草(garangan: 直火乾燥)かによって、特に(3)の方法には大きな差がある。

(1) 発酵

収穫された煙草葉は、刻み作業に入る前にしばらく時間をかけて発酵させられる。Tabak[1925: 74]によれば、ペペアン煙草製造の場合には、先ず女性や子供の手で葉を主脈の一番太い部分から切

表12 Kedjadar副郡における煙草葉の名称と収量(リゲン)、価格(ギルダー)

	デサKedjadar				デサKoeripan		
	名称	バウ当たり 収量	リゲン当 たり価格	バウ当たり 収入	名称	バウ当たり収量	
						最良地	非灌漑地
上	tjelingkrik	50	7.5~12.5	375~625	rampasan	120	72
	pragelan1	60	4~5	240~300	tengghan	36	12
	pragelan2	80		320~400	oeroetan	36	18
	oeroetan	40	1	40	ampadan	72	30
下	ampadan	70	0.5	35	合計	264	132
	合計	300					

表註: リゲンは竹で編んだトレイで、この上で刻んだ煙草を天日乾燥させる。
ただし、ここでは数量単位。

表13 水田作煙草地帯の葉の名称

	枚数	葉の名称		用途その他
		Moentilan郡	Temangoeng郡	
上	3~4	kitir	kitir No.1またはNo.2	良質の葉の時はkapalaと同じように加工
	3~10	kapala	kapala No.1	最上質の煙草(tabak No.1)に加工
	2~3	pipilan	tambaan No.2	2級品煙草に加工
	3~4	koeningan	rampalan No.3	
	2~3	rewasan	tengahan No.4	
下	2~4	kapalan	ampadan No.5	Parakan郡では嗜み煙草(soesoer)用

り離す。その後50枚ほどの小さな山に積んで小さな束にし、それを3～5日間、家の中で保存する。葉はこれによって少しばかり熟成し、むらなく黄変する。

他方、ガラングン煙草を製造するウォノソボ県Garoeng郡では、朝の収穫の際に1級品煙草と2級品煙草を分けて別々に家に運ぶ。その日の午後、1級品の葉3枚を取り上げて主葉脈を葉の先端近くまで取り去る。次いでこれらの葉を縁で重ね、その中に2級品の葉を数枚斜めに差し込んで一緒に巻き上げる。こうして出来上がったものをリンリン(linlin)といい、長さは23cm程度である。これを家の中に高さ30cmほどに積み上げて発酵させる[Verslag Garoeng 1906: 585]⁽³⁰⁾。

この熟成期間はHeijden[1935: 578]によると葉によって差があり、ウォノソボの場合にはampadanで3日、oeroetan 4日、rampasan 5日だという⁽³¹⁾。

この作業では葉脈の扱い方が、ペペアン煙草とガラングン煙草で若干異なる。前者の場合には葉は葉脈から切り離されるが、後者の場合は主脈を除くだけである。ペペアンの場合には乾燥時間が長いので、葉の部分が葉脈部分よりずっと早く乾燥して腐敗の原因になる可能性があり、それで葉脈を取り去って厚さを均等にするのだという[Stenvers 1915: 18]。

(2) 刻み(radjang)

熟成された葉の刻み作業は、早朝か夜間に行われる。良質な煙草を得るためには、刻み後直ちに乾かす必要がある[Tabak 1925: 75]、特にペペアン煙草を製造する場合には直ぐに天日乾燥に移らねばならないからだ[Reijden 1934: 14～16]⁽³²⁾。

この作業にはチャチャック(tjatjak)と呼ばれる独特の道具が使われる。それは厚さ15cmほどの木の台で、その中には広い側に溝が付けられており、それは台の前側(小さい側)で四角形の開口となっていて終わっている。台は、刻み職人が座る低い長いすの上にまたがる形で備え付けられる。職人

が溝にリンリンを運んで左手で軟らかく下へ押し付ると、リンリンの端は溝から前面へ現れる。職人が右手で大きく重い包丁を溝に沿って斜め方向に上から下へ動かすと、各リンリンは極細の糸状にカットされる。

この作業では、溝の中でリンリンに加える力は常に均等でなければならない。さらに刻まれたもの(kerfsel)は一定の厚さでなければならない。ばらけてもいけないので、ナイフは鋭さを保つために時々研がれる。台を削ってしまわないように、その開口部の周りには鉄板が取り付けられており、それに沿ってナイフは動かされる[Verslag Garoeng 1906: 586]。

このように作業は熟練を要するので、刻みがきちんとしてできる者は限られていた。特にガラングンはペペアンより細く刻まねばならず、トゥマングン県のデサModjotengahでは住民1,300人中でこれが正しくできるのは僅か6人だった[Fruin 1923a: 304～305]。こうして、各地方を巡回する刻み職人が登場することになる。このデサではKledoeng、Telahabという他のデサから刻み職人を呼んでいるし[Fruin 1923a: 304～305]、ウォノソボ県Kedjadarの職人の一部は収穫終了後にトゥマングン県まで出かけていた[Fruin 1923a: 270; 1923b: 364]。

それゆえ、この作業に従事する者の報酬は多い。例えばトゥマングン県では1920年代前半に6時間働くと1.25ギルダの稼ぎがあり[Tabak 1925: 75]、デサKedjadarではこの作業に1日当たり50セントと3食、デサKoeripanでは40セントと2食が払われた[Fruin 1923a: 278]が、これらは他の加工作業の賃金と比べると倍以上の水準だった。

刻まれた煙草はKedjadar副郡では直ちに女性の手でリゲン(rigen: 割竹を編んで作られた目の粗いトレイ、同時に煙草を数える単位としても使われる)の上に広げられ、厚さ約5cmの長方形の薄板すなわちエレラン(eleran)に形を整えられる。

リゲンは幅が約30cm、長さ120cmの大きさであり、1つにエレランが5つ並ぶ。この作業は*ンガジャン* (ngandjang) と呼ばれ、これに従事する女性の賃金はデサKoeripanでは1日15セントと2食、Kedjadjarでは25セントと3食である。刻み人1人と女性でKedjadjarでは1日に6～7リゲン、Koeripanでは6リゲンを製造する。したがってこのリゲン当たり経費はKoeripanでは9セントと食事2/3回、Kedjadjarでは11セントと食事1回となる [Verslag Garoeng 1906: 586 ; Fruin 1923a: 278]。

(3) 乾燥・熟成

乾燥は直火乾燥 (*ガランガン*: 主に高度の高い山間部で行われ、1920年代にはウォノソボ県、トゥマングン県で実施) と天日乾燥 (*ペベアン*: マゲラン県、トゥマングン県で実施) に大別される⁽³³⁾。

まず1920年代初のKedjadjar副郡におけるガランガン煙草製造を見よう。リゲンに広げられたエレランは、石釜の上方で木を燃やした弱火に15分程度かざして乾燥させる⁽³⁴⁾。この作業は夕方か夜に行われるのが普通で、デサKedjadjarでは男子3人が一晩に50リゲンを乾燥させ、25セントと食事2回を受け取った。デサKoeripanでは出来高払いで、作業に従事する2名にリゲン当たり2セントが払われた。この後、煙草は望ましい色を付けるため天日で後乾燥され、涼しい場所に保存して再びやや湿り気を帯びさせてから販売された [Fruin 1923a: 278～289; Reijden 1934: 14～16]⁽³⁵⁾。

ペベアン煙草の場合には、刻まれた葉はガランガン加工用より4倍ほど大きいリゲンに広げられるが [Fruin 1923a: 304]、その量は基準がなくまちまちである [Stenvers 1915: 17～18]。この上で長いものと短いものが選り分けられ、天日で2～3日乾燥されるが⁽³⁶⁾、その間に数回ひっくり返される。煙草は赤褐色になると巻き上げられ、2枚のリゲンの間に挟んでもう一晩屋内で保存し湿り気を帯びさせる [Tabak 1925: 74～76]。そして、バ

ナナの樹皮でくるんだ竹籠に詰めて [Fruin 1923b: 365]、量り売りされた [Stenvers 1915: 17～18]。

4. 煙草の販売

販売の様子にも簡単に触れておきたい。加工された煙草はParakan, Temanggoeng, Magelang, Moentilan, Grabagといった取引中心地や農家で、そこへ出向いてきた買付け商人やその代理 (バクル) に売るのが普通だった [Stenvers 1915: 19]⁽³⁷⁾。パッサールへ農民が持ち込む場合もあったが、「若干の大商人が語ったところでは、ケルフ煙草のうちでパッサールに来るのは少量で、それも質の悪いもの」 [Tabak 1925: 78] だった。

買付けには19世紀末にはプカロンガン在住の華人商人に加えて地元のジャワ人商人も活躍したようだが [M.W., vol.Va: 151～152]⁽³⁸⁾、後にはスマラン、プカロンガン、バタン、テガルに本拠を持つ華人商人が大半を手にとめた。彼等は、たいてい地元の代理人を使って仕事した [Tabak 1925: 77]。しかし、クドゥスでストローチェ産業が盛んになるにつれて、クドゥスのジャワ人煙草商人やストローチェ工場主も買付けに参入した [Soenario 1935: 16～17]。これらの商人は一般に、煙草農民に前貸しを行って煙草を確保しようとした [Verslag Garoeng 1906: 588]⁽³⁹⁾。こうして商人の手に集められた煙草は、ケドゥー煙草としてジャワ各地へと輸送されていった⁽⁴⁰⁾。

5. 19世紀初めと20世紀の栽培・加工法の比較

以上に主として1920年代初めの史料にもとづいて、ケドゥーにおける煙草の栽培・加工の特徴を検討してきた。いまこれを先にまとめた19世紀初めの栽培・加工の特徴と比較するならば、次のことが指摘できる。

先ずラッフルズやクロフォードが見た煙草は、刻みの前に葉を葉脈から切り離すという加工法か

ら見てペペアン煙草であり、したがってその栽培は比較的低い地域におけるものであったと判断できる。それをふまえてこの約100年間に変わっていないものを挙げると、高地苗の利用、先端摘みの実施、収穫方法である。また旧ケドゥー地区における水田乾季作の卓越、ウォノソボにおける畑地栽培の卓越もおそらくは変わっていない。ただ、旧ケドゥー地区では明らかにこの間に畑作が拡大し、またウォノソボでも栽培面積の拡大から考えると、従来は必ずしも煙草栽培に適当だとは考えられていなかった所でも栽培が始まったと思われる。

次に変化した点として挙げられるのが、休閒の有無である。すなわち19世紀初めにラッフルズが見た水田では毎年米と煙草の輪作が行われていたが、1920年代初めの史料では毎年の栽培は例外的だった。そこで福祉減退調査から1900年前後のこれに関連する状況を見ると、トゥマングン県では煙草栽培が拡大してその規模が適地面積に比べて大きくなりすぎた結果、「以前には煙草を栽培した後3年間休閒するか、少なくともそこに煙草は植えなかった所で、この期間が2年、場合によっては1年にまで短縮」されたが、この結果、土地が次第に煙草疲れ(*tabak-moe*)を起こし、収穫は質量ともに後退したので、行政側は住民に対し十分な休閒期間を取るようアドバイスしている[M.W.L. Kedoe 213, 216]。また畑作地帯であるウォノソボ県でも、煙草を移植する良く耕された水田や畑は「1年間休閒しなければならない」[M.W.L. Kedoe 213]、Wonosobo、Leksono、Garoeng、Sapoeran郡では「1年間の休閒(土地耕起を伴わないもの)が、煙草を栽培する場合には必要」だと、一般に見なされていた[M.W.L. Kedoe 188]。このように休閒期間は1900年頃にはむしろ短くなりつつあることが指摘されている。

これらをどう解釈すべきかについては現在のところ十分な根拠のある答えを見つけることができないが、ラッフルズが見たのは最良の水田であり、

その後に栽培が休閒の必要な土地にまで拡大し、そしてさらにケドゥー煙草への需要が高まった結果、休閒期間を無理に縮める形での輪作が流行したのではないかと、とりあえず考えておきたい。

また施肥は19世紀初には少なくともラッフルズが見た水田作では行われていなかったが、20世紀にはトゥマングンの水田を除いて肥料が施されるようになった。もっともラッフルズは畑作煙草に肥料が施されていたかどうかについては何も述べておらず、この間に施肥の面で進歩があったと即断することはできない。ただ、いずれにせよ、施肥の開始が基本的には戦後の緑の革命期であった水田稲作と比較するならば、煙草栽培はこの面では高い水準にあったと考えることができよう。

第3章 煙草栽培の経済学

これまで2章にわたって、ケドゥーにおける内地市場向け煙草栽培の特色を検討してきた。それを簡潔に表現するならば、極めて集約的な耕作方法と、高い技能を要求される加工方法といえよう。したがって、それには当然それなりの見返りがなければならぬ。では煙草栽培の利益はどれほどであり、地域経済・農家経済にとってどのような意味を持っていたのだろうか。以下では、農家収入の検討を通じてこの問題を考察したい。

1. 煙草栽培の利益

(1) 地域経済に対する影響

最初に、煙草栽培がこの地域の経済にどのような意味を持っていたかを眺めておこう。19世紀のケドゥーで煙草栽培が主要な生活手段の1つだったことは1章で触れたが、20世紀に入ってもその重要性は変わらなかった。例えばKedjadjar副郡のデサTiengでは豊作年の煙草の売上げは4万ギルダー、Garoeng郡全体では年々の売上げが15万

ギルダールという巨額に達し[Verslag Garoeng 1906: 588]、またトゥマングン県では1914年に煙草栽培の収入が減った結果、地域の商業に悪影響が出たといわれる[K.V. 1915: 228]。1920年代初めのKedjadar副郡では、「煙草はこの地方の群を抜いて主要な富の源泉」[Fruin 1923a: 271]だった。また恐慌期1930年代の報告も「ウォノソボ県では煙草栽培は極めて集約的に行われる。煙草は、常に住民により利益を、この地方には一定の豊かさをもたらしてきた商品作物である」[Heijden 1935: 564]と述べている。内地市場向け煙草栽培は、ケドゥーの地域経済にとって一貫して富の源泉であり続けてきたのである。

(2) 水田作地帯と畑作地帯

それではこのような経済的影響は、水田作煙草地帯と畑作煙草地帯で差があったのだろうか。これを考えるために、先ず各地で製造された煙草の価格を比較検討してみよう。表14はFruin[1923b: 370~371]に挙げられる様々な地域の各種煙草の価格を一覧したものである。

ここから明らかに、ガラングアン煙草の方がペペアン煙草より値が高い。したがって、前者を主に生産する高地の畑作地帯の方が後者を生産する低地の水田地帯よりも、生産コストは余計かかることは予想されるとはいえ、利益は大きいと思われる。

次に地域の農業の中での煙草の位置を、水田作地帯と畑作地帯と比較してみよう。Fruin[1923a: 300, 310]によると煙草栽培は水田作地帯のトゥマングン県では非常に重要ではあるが、Kedjadar副郡などにおけるほど地域経済を支配しているのではない。水田の多くは稲の収穫が年2回可能なので、毎年の稲栽培面積は煙草を遥かに上回り、また様々な他の裏作物の栽培面積も煙草より大きい。県内の主要煙草郡を見ると、Temanggoeng郡では耕地13,000バウ(水田5,000バウ、畑地8,000バウ)に栽培される煙草は約2,500バウであるのに対して稲は5,000バウ、トウモロコシは3,000~4,000バウに達し、キャッサバ栽培もしばしば煙草を面積で上回る。Parakan郡では水田11,600バウ、畑地14,400バウに約4,000バウの煙草が栽培されるが、稲は9,000~12,000バウであり、トウモロコシも煙草より多い。Tjandiroto郡では年間約2,800バウの煙草、6,000~7,000バウの稲、9,000バウのトウモロコシ、2,000~3,000バウのキャッサバが、合計5,800バウの水田と17,800バウの畑地に作られる。またマゲラン県の水田作煙草の中心地Moentilan郡とそれに接するSalam、Salaman郡では稲の2期作または2年3作が可能だが、ここで煙草に必要な有孔性と柔らかい組成を持つのは薄い表層土だけなので水田での栽培可能面積はトゥ

表14 各地域・各種煙草の価格一覧(ギルダール)

地域・種類・年	価 格
Kedjadar・最上質畑作ガラングアン煙草1級品・1922年	7.50/リゲン=375/ピコル
Kedjadar・最上質畑作ガラングアン煙草1級品・1921年	12.50/リゲン=625/ピコル
最上質ペペアン煙草・1922年	70~100/ピコル
最上質ペペアン煙草・1921年	140/ピコル~
Kedjadar・最下層葉原料のガラングアン煙草・1922年	25/ピコル
Temanggoeng・最下層葉原料のペペアン煙草煙草・1922年	10/ピコル
Moentilan・最下層葉原料のペペアン煙草煙草・1922年	5~10/ピコル
Kedjadarの良好な煙草デサ・ガラングアン煙草平均価格・1922年	80~125/ピコル
Temanggoengの良好な煙草デサ・ペペアン煙草平均価格・1922年	40~60/ピコル
Moentilanの良好な煙草デサ・ペペアン煙草平均価格・1922年	40~60/ピコル

出所：Fruin 1923b：370~371より作成

マンダリン県よりも小さく、Moentilan郡では水田12,000バウのうち煙草が作られるのは年に2,500～3,000バウ（20.8～25.0%）、Salamでは10,000バウ中の1,000バウを越えることなく、Salamanでは10,000バウ中の1,000バウ以下だといふ。

これらの水田作地帯ではたしかに煙草は重要だったが、それ以上に米の栽培が多く、地域経済に対する影響は稲の方が大きかったといえよう。

これに対してKedjadjar副郡をはじめとする畑作煙草栽培地帯は高地に位置し、水田面積が小さく畑地が卓越しているの⁽⁴¹⁾で、水稻は十分に栽培することができず、食糧作物としては専らそれより価値が劣るトウモロコシを栽培している。したがって、ここで多くの現金収入をもたらす煙草を栽培することは極めて大きな経済的意味を持つ⁽⁴²⁾。また、この地域は煙草苗の供給地でもあり、刻み職人を各地に派遣もしていた。さらに、煙草栽培は土地なし農民にも生計手段を提供していた。M.W.E[Kedoe 148]によればWonosobo、Garoeang、LeksonoとSapoeran郡では、多数の人々が7～9月には煙草の収穫で生計を立てていた。この地域の経済的煙草依存は極めて強かったといえよう。

(3) 煙草栽培農家の収入

それでは、煙草栽培農家の収益はどれほどだったのだろうか。ここでは、4つの事例を検討してみたい。

①ウオノソボ県Garoeang郡Kedjadjar副郡の1922年の事例（畑地、ガランガン煙草）

先ずFruin[1923a: 277～278]の記述から、煙草栽培のバウ当たり粗収入を計算すると表15のようになる。このように耕地によっては粗収入が1,000ギルダーを超えるものもあるが、他方で差も極めて大きい。Fruinは土地の大部分は粗収量50～150リゲン、収入は50～250ギルダー程度だと結論づけている。次にデサKoeripanとデサKedjadjarにおける生産費を計算すると、表16のようになる。

この2つから純収入はデサKedjadjarの大土地占有者の場合にはFruinが別の箇所[Fruin 1923a: 319]でも述べているようにバウ当たり数百ギルダーに達し、デサKoeripanの平均的な農民の場合でも、賃労働者雇用がほとんどなく生産コストが少ないために十分な利潤が出ることがわかる。

②トウマンダリン県の1922年の事例

2つ目はトウマンダリン県の3つのデサの事例であり、Fruin[1923a: 306～307]が載せるそのデータを一覧すると表17のようになる。

これらは明らかに高収量の水田であり、十分な利潤が出ている。特にデサGembjangのルラーは水田4バウで煙草を作っており、純収入は1,000ギルダーを越えると見てよい。

③マゲラン県Moentilan郡の1922年の事例

次の表18は水田作地帯Moentilan郡の2つのデサの事例であり、ここでも前2地域ほどではないが十分な利益が出ている。

④ウオノソボ県1930年代半ばの生産コスト（良地1バウ当たり）

表15 Kedjadjar副郡における煙草のバウ当たり収量(リゲン)と粗収入(ギルダー)

デサ	土地種別	収量	粗収入
Kedjadjar	畑地の1/9：最良地	250～300	1,000
	畑地の1/5：灌漑できない土地	150	
	畑地の2/3：毎年栽培は不可		
Koeripan	畑地の1/4：良質地	200～300	400以下
	畑地の3/4	160以下	
Tieng	一部の最優良地		1,000超
Tambi	一部の最優良地		1,000超

出所：Fruin 1923a：277～278より作成

表16 デサKoeripan、Kedjadarにおけるパウ当たり煙草生産費(ギルダ―)

	デサKoeripan	デサKedjadar
苗	自家生産	
土地耕起	家族労働とサンバタンによる	50(大土地占有者の場合)
移植	家族労働による	家族労働による
肥料代	不明	15~18 60(大土地占有者の場合)
草刈り賃金	不明	12.5/年
除草	50	46~47
脇芽除去等	家族労働による	家族労働による
収穫	食事のみ	
刻み	17日労働=9+67食	35~50日労働=26.25~35.5+(210~300)食
乾燥	出来高高い(2ct/リゲン)=1	5~6晩労働=3.75~4.5+(30~36)食
薪代	5	30~36
合計	65+	216~233+(240~336)食 =216~233+24~7.12=240~290

表註：デサKoeripanの畑地は100リゲン生産の平均的な栽培で計算。

デサKedjadarの畑地は灌漑可能な最良地(250~300リゲン生産)で計算。

Kedjadarでは仮に食事代を一食17セント(根拠はFruin[1923a:312]が載せるデサMendoetの野菜と米の食事12人分が2ギルダ―)と仮定すると、40.8~57.12ギルダ―、現金支払いと合わせても257~290ギルダ―、あるいは一食10セント(根拠はFruin[1923a:314]が載せるデサMendoetの刻み職人の食事2人分が20セント)と仮定すると、24~33.6ギルダ―、現金支払いと合わせても240~267ギルダ―。

表17 トゥマングン県における煙草栽培の収入(ギルダ―)

デサ	煙草の種類	粗収入	純収入
Moedal	ペペアン	水田330、畑地±320	水田100~160 畑地 90~120
Modjotengah	ガラング	水田340~400(250リゲン)+25~50(下層葉から作るペペアン分)=360~425	100~150
Gembjang	ガラング	1,045(ルラーの最良水田、275リゲン) 500~800(他の最良水田、ペペアン含む)	250~500

表註：デサGembjangのルラーの粗収入は22年価格の1リゲン当たり3.80ギルダ―により算出されている。

また純収入は全ての作業を賃労働で行うとして算出されている。

出所：Fruin 1923a：306~307より作成

最後の例(表19)は1930年代半ばの、ジャワ経済がようやく恐慌の影響から脱し始めた時期の畑作煙草の生産コストである。これを①のウォノソボ県の1922年の生産コストと比較すると、あまり減っていない収穫・加工費を例外として、大きな経費節減が行われていることがわかる。この結果、1935年の良地1パウ当たり平均煙草粗収入は100ギルダ―ほどになるので、かなりの黒字が残る。1930年代にもこの地域の煙草栽培が伸びている理由の一端は、ここにあったと考えられる。

(4)米作収入との比較

次に、煙草栽培の収入がどれほどの水準かを考えるために、米作収入と比較してみよう。Fruin[1923a:318~319]は「(煙草栽培が有利かどうかという)この問題を正しく考えるためには、水田煙草と畑作煙草を分けるべきである。前者に関しては既にはっきりと、煙草はそれに適した土地で育てられる場合、稲より利益が大きいことは疑いないといえる。東モンスーン季に煙草を植える水田は、普通2回目の稲作に十分な水を持ってい

表18 Moentilan郡における煙草栽培の収支（ギルダー）

バウ当たり生産費		デサBodjong	デサMendoet
苗購入		6.60	
土地耕起	犁かけ	9~9.60	
	鋤作業	4.60	
	植床造り	28.80~33.60	
	植床鋤がけ	20	
	畝立て	2.4	
小計		64~70	27
施肥	購入費用	1~1.50	1~1.50
	水田への運搬	2.50	2.50
	施肥作業	1.20	1.20
	小計	2.50~5	2.50~5
植付け		3.50	2(サンバタン食費)
補植		1.20	—
除草(植床清潔維持)		55	10
芽、先端摘み		4+1.20	—
耕作費合計		140~150	45~50
加工費		63	15
総経費		200超	60~65
バウ当たり粗収入(1922年)		良田270~370	3級水田125~150
バウ当たり純収入		60.70~160	60~90

表註：Bodjongの事例はタバサンを行う大土地占有者の栽培で、全ての作業に賃労働を使用。
加工費にはタバサンによる購入費用含む。Mendoetの事例では多くの作業が家族労働、もしくはサンバタンで行われている。

出所：Fruin 1923a：311~316より計算

表19 1930年代半ばウォノソボ県における煙草生産費（ギルダー）

	経費項目	サンバタン による場合	賃労働使用 の場合
苗床関係	竹購入	1.00	1.00
	アランアラン購入	1.30	1.30
	小計	2.30	2.30
土地耕作関係	土地耕起	3.60	6.30
	植穴造り	0.60	0.60
	厩肥購入	6.00	6.00
	肥料運搬	0.40	2.50
	植穴への施肥	0.30	0.30
	植付け	0.32	0.32
	苗購入費	5.00	5.00
小計		16.22	21.02
作物維持管理	除草等	4.60	8.05
収穫・加工	小計	20.33	23.45
計		43.45	54.82
労働者食費	トウモロコシ	10.55	2.96
合計		54.00	57.78

出所：Heijden 1935：576~583

る。それにもかかわらず煙草が選ばれるのは、人々が煙草を東モンスーン稲より有利であると見なししていることを示している。この地方(ケドゥー理事州のこと=引用者)では稲収量は東モンスーン作も西モンスーン作もほとんど変わらないので、煙草が前者より有利だとすれば、後者より利益が多いことになる。この問題に関する2番目の指標は、煙草を植える場合と西モンスーン稲を植える場合に借地料の差である。煙草を植える水田には、そこに煙草を作ることができない水田の2倍以上の借地料が払われる。」と述べ、乾季には米より煙草を作った方が利益が大きいと主張している。さら

にFruin[1923a: 302]が載せる、トゥマングン県における煙草栽培の場合と稲作の場合のそれぞれのバウ当たり借地料を一覧すると、表20ようになる。煙草栽培のための借地料は、稲作の場合の倍以上である。このことは、煙草栽培の利益が如何に大きいかを示している。

Fruinは畑作については何も述べていないが、表20に示される灌漑可能畑の借地料の高さから考えても、畑地での煙草作の有利さは疑問の余地がない。

このように、煙草栽培は何れの場合でも極めて有利な選択であったということが出来る。

表20 トゥマングン県における借地料一覧(ギルダー)

デ	サ	煙草用	稲作用
Modjotengah (Kedoeah副郡) : 中等地		80~100	10~12
Moedal : 水田		50	25
Moedal : 畑地		25	
Gembjang : 煙草+トウモロコシ、1等水田		300	
Gembjang : 煙草+トウモロコシ、2等水田		200	
Gembjang : 米2回			50
Gembjang : 煙草+トウモロコシ、灌漑可能畑		100~200	

出所 : Fruin 1923a : 302

2. 経営規模による収入格差

さて、これまでは煙草栽培の有利さを一般的に論じてきた。しかし、これまで挙げてきた事例が示唆するように、農民階層あるいは経営規模によりそれには大きな差が見られるようだ。ここでは、その問題をもう少し検討しておきたい⁽⁴³⁾。

先ず指摘すべきは、煙草の収量は土地の質に極めて大きく影響されることである。既に見たように1920年代初めのデサKedjadarでは最良地はバウ当たり250~300リゲンの生産を上げるのに対して、灌漑できない畑地は150リゲン以下であり、畑地の2/3は毎年の栽培が不可能だった。デサKoeripanでも1/4の良質な畑地は200~300リゲンを産するが、残りの畑地では160リゲン以下だった。また1874年のルドック県でのバウ当たり収量は最

良地が10ピコル、2等地5.5ピコル、3等地は3ピコルと大きな差があった[K.V.1875: 176]。いま1つ、1935年のウォノソゴ県の事例をHeijden[1935: 576~577]から見ると、この地域では最良の灌漑可能地からは最大で約360リゲンの葉が収穫されるが、最も悪い土地からは72リゲンを越えない場合もある。葉の種別毎に平均収量を見ると表21のようになるが、良地と劣等地の差は大きい。

そしてこうした最良地に煙草を作ったのは、栽培規模の大きい富裕農民だった。Fruin[1923a: 275]によると、デサKedjadarの灌漑可能畑での煙草栽培のための深耕は常に賃労働で行われるが、このような経営を行うのは栽培規模が1バウを越える栽培者だけだった。加えて、このデサでは前章で見たように富裕農民は一般農民よりも遙

表21 ウォノソボ県における煙草各種葉の土地
肥沃土別収量(リゲン)

葉の名称	最良地・ 良地	劣等地
Ampadan	48	30
Oeroetan, Tengahan	36	24
Tenggokan, Rampasan	120	60
合 計	204	114

出所：Heijden 1935：576～577

かに多量の肥料を施しており、これによりもともと良質だった土地はますます生産性を高めたと考えられる。

同じような富裕農民の事例は、トゥマングン県のデサGembjangでも見られる。先に述べたように、このデサのルラーは最良水田4バウで煙草を作り、22年にはバウ当たり1,045ギルダー、合計4,180ギルダーもの粗収入を上げていた。彼の経営方式の具体的な記述は得られなかったが、このデサでは分益小作も賃入れもない[Fruin 1923b: 301]といわれるので賃金労働者を雇って各作業を行わせていたと考えられる。

さて、ジャワでは水田米作の場合、しばしば分益小作が大土地占有者が経営を拡大するための手段として用いられたが、煙草の場合にはどうであろうか。1920年代初めのケドゥーでは、Kedjadar副郡の調査デサKedjadarとKoeripanでは分益小作に出される土地はなかった[Fruin 1923a: 271]が、トゥマングン県[Fruin 1923a: 301～302]とマダラ県Moentilan郡[Fruin 1923a: 310～311]では煙草栽培でも分益小作が行われていた。前者の県についてはその内容に関する具体的な記述がないが、後者の地域では調査デサのMendoetでもBodjongでも収穫は折半され、Mendoetでは苗は小作側が用意し、Bodjongではそれは双方の負担となり、土地占有者がそのための前貸しを提供し、さらに耕起のためにバウ当たり30～50ギルダーを払うという条件だった。

しかしこの方法は、先に挙げたデサGembjangのルラーが賃労働者を雇用した事例に示されるように、経営拡大の主要な方法にはならなかったようだ。富裕農が煙草栽培を拡大する主要な方法は、最適地を借地してそこを賃労働によって経営することだった。既に見たように、トゥマングン県各地における煙草栽培のための借地料は高額であり、またMoentilan郡のデサMendoetでも4級水田が煙草栽培に限ってバウ当たり80ギルダーで貸し出されるが、このような高額借地料は富裕農民のみが負担可能であり、借地したのはこの層であったと考えられる。

こうした点がさらにはっきりわかるのが、Kedjadar副郡の事例である。デサKedjadarとKoeripanでの聴き取り調査によれば、土地を貸し出すのは主として規模のより大きな土地占有者たちであり、それは残りの土地を耕作するための現金を手に入れるため、借り手は同じデサの住民である。しかし、デサKedjadarの最優良地は近隣デサTiengの富裕な煙草農民たちにバウ当たり400ギルダーまでの金額で貸し出されている。劣等地はデサ内の非土地占有者に50ギルダーで貸し出される。またKoeripanでは灌漑可能な良地の借地料は100ギルダー、灌漑のない最良畑地は35ギルダーである[Fruin 1923a: 271]。

この事例からわかるのは、デサKedjadarのより大きな土地の占有者には先に見たような賃労働者を雇用して自ら煙草を栽培する者と、土地を賃貸する者がいたことである。後者の中に占有地全部を貸し出した者がいたかどうかは不明だが、彼らの中にはそれによって得た現金収入を残った土地に煙草を栽培するための賃労働者雇用に向けた者も多かったと考えられる。そして、ここで述べられる最優良地の賃貸しを借り手であるTiengの富裕農民たちの側から見ると、彼らはデサの領域を越えて最良地を手に入れて経営を拡大している。富裕農民は借地によって経営面積を拡大し、

それを賃労働で経営して利益を増やそうとしていたのである。

3. 華人買上げ商人の支配？

さて、植民地期を通じて煙草の流通を支配したのは華人商人であり、前章で触れたように彼らは前貸しを供与して煙草を確保した。それでは、この前貸しは農民にとってどのような意味があったのだろうか。以下では、華人煙草買上げ商人の前貸しの中味を検討して、その点を考えてみたい。

最初に見るのはGaroeng郡の1900年代半ば頃の事例である。Verslag Garoeng[1906: 588]によると年利は20～50%であり、「農民は現金が必要な時期に華人から借りるためウォノソボ(の町)へ行くが、彼らは最も安く金を提供してくれ、またたいてい農民を個人的に知っている。この貸付けは完全な信用貸しであり、この農民は同じ華人に対して後で煙草を売らねばならない義務は全くない。煙草収穫後、借金は清算されるが、祝祭の時期が暫くあった後、新規の貸付けが始まる」という。この事例では華人の貸付けに煙草引渡し義務はなく、彼等の煙草確保は専ら顔見知り関係＝信頼関係によっており、この限りで融資条件は極めて緩やかであるといえる。

これに対して1920年代のMoentilan郡の事例は、借り手にとって条件がより厳しい。Fruin[1923a: 317]によると、デサMendoetでは小規模土地占有者は華人から100～300ギルダー借りるが、契約には証紙を貼った書類が作られ、何人かの借り手の連帯保証が求められ、水田と屋敷地が担保にされる。利子は書類には月1.5% (県銀行の利子と同じ) と書かれているが、借用額を実際より多く記載する(例えば実際に借りたのは100ギルダーなのに120ギルダーと記載)華人もいる。デサBodjongでは、華人から金を借りるのは富裕者だが、煙草供出義務付きである。利子は直接的な形を取らず、例えば120ギルダーの価値がある煙草に90ギルダー

や100ギルダーといった値を付ける形で取られる。その価格が低すぎるので前貸し供与者に供出したくない場合には、約6ヶ月の煙草期間当たり20%、月利では3～5%の利子を付けて、前貸しを返済する。貸した金50～60セント毎に最良品煙草(kepala) 1カティ(70セントの価値)供出を義務づける場合もある。

おそらくはこのような条件での前貸しが一般的だったと思われるが、現実には供出義務が実行されなかった事例も見られた。トゥマングン県のデサGembjangの事例は、その一例である。1920年代初め、このデサで華人がかなり大規模に前貸しを供与していたのは6子村(doekeoh)中の1つだけだったが、以前には他の子村でも煙草栽培0.5バウ当たり300～500ギルダーといった巨額を貸し付けており、それらは合計すると60,000ギルダーに上っていた。この融資は利子が30%、市場価格で供出する義務付きだった。しかし、庶民金融銀行がこのデサで集中的な融資活動を展開して合計16,000～20,000ギルダー(1人当たりでは11～14ギルダー)を貸し付けたことに加えて、華人から前貸しを受けた者が最良の煙草をしばしばよその買い上げ者に売ってしまったことによって、華人の前貸しは激減したという[Fruin 1923a: 307～308]⁽⁴⁴⁾。

では、何故このようなことが起こり得たのであろうか。それは前章末で見たように、ケドゥー煙草の買付けには華人商人だけではなくクドゥスのジャワ人商人など様々な人々が参入し、競争が激しかったことに理由が求められよう。次に掲げる1902年の記事は、その一端を具体的に物語るものである。

「(ブカロンガンの)刻み煙草商人(大半が華人)は、本年、前年ほど多くの煙草をウォノソボから確保できないことを恐れているが、それは現地の不作のせいではなく、Poerworedjoの有名な華人煙草商人を長とし

たバタヴィアの数十人の華人が、ウォノソボで煙草を買い付けるために資本金15,000ギルダーで会社を形成したからである。この煙草は近年、バタヴィアで非常に人気が高い。これまでこの煙草は全てプカロンガン市の華人煙草買付け者達によって買い上げられ、彼らの代理人の仲介でバタヴィアで販売されていた。

ウォノソボの煙草栽培者は普通、ジャワ正月の数日前に彼らのジュラガン(djoeragan)と一緒にプカロンガンへ来て、彼らから提供すべき刻み煙草の代わりに現金とバティック布からなる前貸しを受け取っていた。しかし、本年は前貸しを要求するためにプカロンガンへ来たのは若干名に過ぎなかった。大半の者は既に新しい会社から現金を受け取っているのは確実である。現在では、バタヴィアの華人煙草商人達は自らウォノソボで、したがって生産者から直に従来よりずっと安く煙草を買い付けている。」[I.M.1902: 294]

ここではそれまでウォノソボの煙草取引を独占していたプカロンガンの華人商人の地位が、その最終販売地であるバタヴィアの華人商人の挑戦によって脅かされているのである。こうした状況がある時、煙草市場は売り手市場となり、貸付け条件が緩和される、あるいは栽培者は前貸しを受けた商人でなくともより有利な価格を付ける商人が現れるならば、そちらに煙草を売ったとしても不思議ではなかったといえよう。

この結果、華人商人は前貸しに慎重にならざるを得なかったのである。そうした状況が続いたことは、1930年代の報告からも明らかである。Heijden[1935: 586]によると、ウォノソボ県では「華人商人はこの数年間事実上もう融資を行ってこなかったが、1934年の煙草栽培に対しては再び極めて慎重に、一般により上質の煙草を持っている富裕な顧客に対して前貸しを供与した。……商

人達は合計するとかつての煙草前貸し金100万の半分未満を貸し付けたといわれる。……借り方に対して強く出ることができないことは、商人達が起こした訴訟が極めて少ないこと、また出血セールが散発的にしか行われていないことに示される。……前貸しが供与される対象は、主に大規模煙草栽培者である。加えて、庶民銀行に借金がある場合には、銀行が常に優先されることも計算に入れられる。だから銀行による巨額の融資がある場合には、常に融資関係から排除される。華人商人による融資はそれによっても大きく減少した。」という状況だった。

ここでは、借り手が仮に融資条件を守らなかった場合でも、訴訟などを通して強く出ることができなかったことが指摘されている。このように見ると、華人の前貸しは表面上は厳しい条件であるが、現実には必ずしもそうではなかったと考えてよい。むしろ、栽培者、とりわけ大規模栽培者にとっては煙草の販売先を確保できるメリットの方が大きかったように思われる。

さて、この事例でもう1つ注目されることは、華人商人たちが前貸し対象者を選ぶ場合に庶民金融銀行から融資を受けている者を外していることである。このことは、この地域ではこの政庁金融機関による融資がかつて筆者が検討したブスキ理事州やスラバヤ理事州の各県とは異なって、1930年代の恐慌期にもしっかりと実施されていたことを示唆している⁽⁴⁵⁾。実際ウォノソボでは、Heijden[1935: 596]によると「以前の年には主に煙草畑の土地耕起時に貸付けを行っており、個別の貸付け額は市況低下の年(1931~32年)にもほとんど、あるいは全く減らなかった。…不況に突入した後、煙草栽培ではなお土地耕起に関わる作業に高すぎる賃金が払われていたのは、広く見られる現象だった。なぜなら、土地所有者に対して銀行は常に融資機会を開けていたからである。労働者(クーリー)はここから利益を得た。煙草栽培が1パウ以

表 22 ウォノソボにおける住民煙草に対する一般庶民金融銀行の融資(1935年、ギルダ―)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	合計
件数	2	10	295	667	2,319	458	303	24	4,078
金額	10	333	5,593	10,072	19,119	3,775	2,857	462	42,221

表註：この数字には煙草以外の目的のための融資が75件、1,095ギルダ―含まれるので、煙草融資の合計は4,003件(98.2%)、41,126ギルダ―(97.4%、1件当たり10.3ギルダ―)である。

出所：Heijden 1935：601

下の小土地占有者についても、銀行は土地耕起融資を提供することによって、生活水準を人為的に高く維持した。この融資を可能にしたことによって、煙草栽培者はそうでない場合と比べてよりも、自分の利害を促進することができた。したがってこの貸付け政策は、多くの焦げ付きを生んだ。」という。1935年のこの融資は表22からわかるように4,003件、41,126ギルダ―であり、1件当たり平均額は20年代初めと比べると大きく減ってはいるが、10.3ギルダ―だった。貸付け月は4月、5月に集中しており、この融資は土地耕起費用や苗購入などに当てられたと考えられる。

この結果、華人商人の前貸しがなくなったとしても、煙草栽培者が資金不足に陥ることは比較的少なかったと思われる。このこともまた、栽培者と華人商人の関係をますます前者に有利に展開させたのだった。

おわりに

本稿ではケドゥーにおける内地市場向け煙草生産の発展を辿り、その栽培・加工の特徴を述べてきた。そして、それらをふまえてこの生産が一貫してこの地域の富の源泉であったこと、その経済的影響は畑作地帯の方が水田作地帯より大きかったこと、煙草栽培の収益は稲作より遥かに大きかったこと、収益性の点では賃労働者を雇用して行う大規模経営の方が優位に立っていたが、経営拡大は主として借地によって行われたこと、華人買

上げ商人と生産者農民との関係は決して商業高利貸し資本による一方的支配と位置付けられるものではなく、むしろ後者が相対的に優位な立場にあったことを明らかにしてきた。

ただ本稿では専ら煙草生産とそれが農家経済・地域経済に及ぼす影響の構造的な特質を検討することに主眼をおいたので、それらを通じてこの地域の社会経済が市場変動の影響をどのように受けて、どのように変容したかという点にはいっさい触れることができなかった。この問題を考えるためには、ケドゥー煙草がどのように流通し、どのように消費されたかという点の検討が不可欠である。これは次の課題にしたい。

註

- (1)近年の研究には、王侯領とブスキを対象にしたPadmo[1994]がある。またHouben[1994]は王侯領の煙草栽培を詳細に扱っている。筆者もかつてブスキ煙草と王侯領煙草について論じたことがある。植村[1983]、植村[1997:6章]、植村[2001]、Uemura[2002]を参照。
- (2)この地域はしばしば行政区画が変更され、ウォノソボ県は1874~1900年にはバゲレン理事州、1929~33年にはウォノソボ理事州に属したが、本稿ではケドゥー理事州として扱う。1874年以降の行政区画変更問題は深見[1991]を参照。1874年以前の行政区画については、さし当たりK.V.[1872: Bijl.P]を参照。なお、付属の地図はAtlas[1938: 18a]をもとに作成したもので、1930年現在の行政区画を示して

- いる。
- (3) 加工された煙草は、クロフォードによれば十分に乾かされた後、華人の監督下で数オンス単位に小分けにされて中国紙に包まれ、商標がスタンプされ、一定数が籠に入れられて売られる。品質には3等あり、上層葉から作られたものが1級品、中層葉からのものが2級品、下層葉からが3級品となる。ケドゥー煙草は人間が担いで山越えし、スマランの市場に出されるが、その量は毎年300万ポンド(約1,400トン)に上り、1816年のプカロンガン理事報告によれば、ケドゥーが煙草から得る利益は毎年15万～20万スペイン・ドルに達した。そこからはさらに各地へ販売されるが、質の悪いものは主としてバタヴィアと西ジャワへ向かい、上質のものは海峡植民地、最上級品は南セレベスへ向かったという[Crawford 1820, vol.3: 416～417]。なおバニユマス産煙草はプカロンガンへ移出され、そこから原住民商人の手で船でバンタムへ運ばれた。さらに東端地方、マドゥラはプゲル(Poeger)から煙草が供給されていたという[Fruin 1923: 349～351]。
- (4) これに関する詳細は、さし当たり植村[2005a]を参照。
- (5) バウトがここで「中国煙草」としているものは、明らかに在来種であるジャワ煙草であると考えられる。ジャワで「中国煙草」なる品種が栽培された事実はなく、註(3)で述べたように19世紀初めには煙草は華人の監督下で中国紙に包まれて出荷されていたから、バウトはケドゥー産ケルフ煙草をこのように表現したと考えられる。
- (6) 1910年代末には船腹不足に伴って煙草栽培の制限が実施された。これについてはさし当たり植村[1998: 10～11]を参照。
- (7) 恐慌期の煙草については、植村[1997]を参照。
- (8) Kalialang郡は、シンドロ丘陵に位置することからすると、後のGaroeung郡に相当する地域であろうと思われるが、そこでは福祉減退調査によれば「煙草栽培がこの20年間に拡大した」[M.W.L. Kedoe 214]とされ、1880年代以降、さらに栽培が発展して表2の数字になったと考えられる。
- (9) これについてはさし当たり植村[2005a]を参照。
- (10) 同様のことはTabak[1925: 70]も指摘している。
- (11) 1915年の観察によれば輪作のやり方はやや異なっており、Temanggoeng郡では「煙草(5/6月～10/11月)→クレテック稲(12/1月～4/5月)→裏作物(5/6月～10/11月)→稲(12/1月～4/5月)→煙草」という形を取る。したがって、煙草は2年毎に同じ土地区画に作られる。しかし煙草が3年1作の場合もしばしばで、特にParakan郡ではこれが非常に多い。この場合には、「煙草(5/6月～10/11月)→クレテック稲(12/1月～4/5月)→裏作物(5/6月～10/11月)→稲(12/1月～4/5月)→煙草」という順番になる。裏作物はほとんどがトモロコシであるが、若干のケースでは唐辛子を作り、間作にトゥロン(terong: ナス科の野菜)を植える[Stenvers 1915: 7～8]。
- (12) Heijden[1935: 567]も同様に、ウォノソボ県では毎年煙草を栽培できる畑地は小面積の灌漑可能な所だけで、普通は2年1作、最も悪い土地は3年1作であると指摘している。なおM.W.I.[Kedoe 325]によると、1903年段階でウォノソボ県には361の泉があり、水田2,429バウ、畑地605バウに給水していたといわれるので、煙草栽培に使われた灌漑可能な畑地への給水もこれによったと考えられる。
- (13) この副郡は高度が高いため煙草は7～8ヶ月

かかり、トウモロコシは完熟するにはそれよりなお長い期間を要するので、しばしば両作物が同時に耕地上にあることになる。煙草の収穫(数ヶ月かかる)が終わる前に、もっとも高い位置にあるデサでは収穫開始以前から、トウモロコシは煙草の間に播種される。ディエン高原の非常に高い所にあるデサでは、トウモロコシの収穫前に煙草が新たに植えられることがある。そこでは煙草は2月3月に植え付け、Kedjadarではやや遅くなる。9月10月には収穫は大半が終わる[Fruin 1923b: 356]。

- (14) 当時、ディエンの苗は1,000本当たり75セント～1ギルダーだった。なおマゲランでは、農民は自分で苗を育てることはないが種子を採集し、これが高地地方(Dieng)へ運ばれて蒔かれ、そこから採れた苗は再び低地へと運ばれていた[Fruin 1923b:362]。
- (15) この結果、この地域では販売用苗に日覆いをする必要がなかったが、このことは苗に十分な日射を与えることが遠距離輸送される苗を強くするために必要だとも考えられていた。こうした点も含め苗栽培に関してほぼ同様のことはVerslag Garoeng[1906: 518～521]も指摘している。この報告にはGaroeng郡における苗作りが詳細に描かれている。ケドゥー煙草の苗育成に関してはさらにVerslag Garoeng[1906: 515]、Tabak[1925: 68]、Stenvers [1915: 11～14]、Heijden[1935: 574～576]、M.W.L. [Kedoe 191, 213]を参照。
- (16) このように排水に留意することは、1900年代前半においても同様だった。M.W.L.[Kedoe 213]は、マゲランでは「この栽培にはしっかりした注意が払われる。土地は乾かされ、かなり深く掘り返され、その後、畝がきちんと作られるが、それは良く乾かし通気させるためにしばらくの間そのまま放置される」、トゥ

マングンでは「かなり深く耕される。整然とした(flink)溝のネットワークが、雨水の排水のために作られる」と指摘している。

- (17) 畝造りには排水以外にも理由があった。ここでは下層の土はローム状であり、薄い表層土だけが煙草に必要な浸透性を持っているので、十分な厚さの土層を確保するためには表層土を集めなければならなかった[Fruin 1923a: 310]。
- (18) ラヤットとは本来、「大土地所有者のもとに寄寓する若者」の意味であるが、ここでは「煙草栽培者の近くに住み、無償労働提供の対価として衣服と食事を供給される若者」を指す。
- (19) ウォノソボ県のこの作業については、M.W.L. [Kedoe 188]に1900年代前半、Heijden[1935: 574～576]に1930年代半ばの様子が描かれているが、後者に緑肥(crotalaria)を使っていることを示唆する記述がある他は、基本的に変わっていない。
- (20) Heijden[1935: 574～576]は、ウォノソボ県におけるこの作業を具体的に描写している。それによると、植え穴を空けるのは女性の仕事であり、5人が3日間働く。穴空けの直ぐ後から、たいていは女性か子供がそこへ厩肥を施すために歩いて歩く。苗の移植は肥料を入れてから2～3日後で、男女2名で4日で済む。平均すると1㎡に6本、バウ当たりでは約42,000本の苗が植えられる。ただし、農民が利用可能な苗は、必要な場合には約1ヶ月後に補植をしなければならないので、これより多くなければならなかった。なお、M.W.L.[Kedoe 192]によれば、マゲラン県でも1900年代前半には山間部で厩肥が発酵させられた後、煙草、トウモロコシ、タマネギ、ジャガイモ、落花生、豆その他の野菜に施され、低地地方でも牛糞が煙草栽培に使われており、「休閒なしの水田での収量がますます

減少している、ジャワ人はますます施肥の必要が大きくなるであろう」とあり、この時期には煙草栽培による地力後退を防止するために、水田にも施肥されていた可能性がある。またトゥマンガングンでは高度の高いデサでは肥料使用が昔から知られていたが、当時、低い位置にある地方でも肥料使用が増加しつつあった。その原因を、同報告は人口増加の結果、土地の休閑がなくなったことに求めている。肥料として用いられるのは厩肥と灰であり、水田においてさえ、既にあちこちで肥料がやられるという。これらから考えると、煙草への施肥はかなり以前から行われていたようである。なお、1920年代初には化学肥料(硫酸)も使われ、ウォノソボ県では簡単に入手可能だったが、デサKedjadarの住民によればその使用は栽培がよくない場合や後退した場合に限定されていたという[Fruin 1923a: 272~273]。

- (21) トゥマンガングン県デサGembjangの例では、堆肥の価格は1レンバット当たり15~20セント、その運搬費が5~10セントかかり、灌漑可能な畑地では1バウ当たり約70レンバット、灌漑のない畑地ではその倍の施肥が必要なので、経費は前者では3.5~7ギルダ、後者ではほぼその倍かかったという[Fruin 1923a: 303]。
- (22) Heijden[1935: 570~571]によると、ウォノソボで厩肥作りに利用されるのは主に馬、山羊、マーモットであり、最良の肥料はマーモットから得られる。次が山羊、最後は馬である。これらはそれぞれ約40日間、1ヶ月半、2ヶ月以上おいた後、様々なものと混ぜられる。煙草栽培1バウ当たりに必要な肥料を確保するためには、馬なら1~2頭、山羊12~15頭、マーモットなら60~90頭を持っていることが必要であるが、一般的にいて住民は十分な量の肥料を自給できていたという。また

Fruin[1923a: 276]では最良のものは山羊の糞であり、デサKedjadarでは様々な種類の動物糞と草、ゴミを混ぜた堆肥に対して1担(mansvracht)当たり30セント、完全な山羊の糞には50セントが払われていたこと、このデサのルラーによると1バウに必要な肥料は約120担であるが馬2頭で生産可能であり、馬1頭は山羊10~15頭とほぼ同量の肥料を産するという。

- (23) その理由は、デサKedjadarでの人々の説明ではあまり多くない人数の方がよりよい仕事ができるからだという。
- (24) Heijden[1935: 574~576]によれば、この地域の除草は4回行われるのが普通であるが、傾斜地では雑草が余計にはびこるので5回になるという。作業は35日間隔でなされるが、1回目(3~4月)のみ男の手で行われ、その後は主に女性の仕事となる。3回目の除草(5~6月)と同時に、煙草の茎を丁寧に掃除する(ngrewosi)。また4回目の除草(6~7月)と同時に、もしくは直後に穂先摘み、つまり余計な最上端葉、芽と枝を除去する(moenggel)。なおM.W.L.[Kedoe 213]では移植1ヶ月後に1回目が行われ、その1ヶ月後に2回目を実施されるが、この時には最下層の2枚の葉も摘まれる。そしてその2ヶ月後に3回目の除草が行われ、その時には先端が摘まれる。その2~3ヶ月後、収穫を始めることができるとあり、除草回数が増えた可能性もあるが詳しいことはわからない。
- (25) 例えばMoentilanの最良の煙草デサでは、土地を鉤で細かくする作業が3回行われるが、第1回目はかなり深く、2回目はややそれより浅く、そして3回目は土寄せがなされる。この場合、経費は合計して50ギルダあまりになる[Fruin 1923b: 363~364]。またM.W.L.[Kedoe 188]によれば、遅くとも移植後2ヶ月

- 以内に煙草苗に土寄せすること(生育状況が良好な場合には35日後)、鍬で2回整地することが、必要な作業としてあげられている。
- (26) 煙草の頂上では、葉をよりたくさん取るためにだいたい3本の脇芽が残された[Fruin 1923a: 277]。
- (27) ただしトゥマングン県のデサModjotengahでは芽摘みに女性労働者を雇い、10日毎に2ヶ月間仕事をさせて4.50ギルダを払っている[Fruin 1923a: 303~304]。
- (28) Tabak[1925: 69~70]ではやや異なって、収穫開始時期を移植後80~100日、終了まで1ヶ月半だとしている。また同史料によれば、収穫時期は市場価格によっても影響され、たとえば最上級葉収穫が終わる頃に雨が少ない気候の場合には価格が高いため、さらに収穫できる葉を付けさせるべく煙草はそのまま成長させるが、逆に市場価格が安い場合、水田作では次にジャワ稲を栽培するために煙草を早々に片付けてしまうという。
- (29) ここに挙げた以外にもTabak[1925: 73~74]、M.W.L.[Kedoe 213]、Verslag Garoeng[1906: 579]に、葉の分類に関する記事が見られる。なおHeijden[1935: 588]によれば、収穫前には家族による小規模なスラメタンが行われたという。
- (30) 1920年代初のKedjadjar副郡デサKoeripanの事例では、主軸を取り去るのは発酵が終わってからである。この作業に対してKoeripanでは女性達は現金賃金を受け取ることはないが、一緒に連れてきている子供達とともに食事1回に与るといふ[Fruin 1923a: 278]。
- (31) M.W.L.[Kedoe 213]によると、ウォノソボ県では刻む前に葉6~10枚を一緒に巻き上げて4昼夜ほど家の中に置き、トゥマングン県でも葉は家の中で軽く発酵させられるが、マゲラン県では「摘葉後、1~2級品は内地消費向けであるならば、直ちに細かく刻まれ」るとあり、1810年代と同様に緑葉のまま刻まれている。
- (32) 中には刻まずに出荷される場合もあったようで、M.W.L.[Kedoe 213]によると、トゥマングン県では発酵させた後、質の劣るものは刻まずに葉煙草として出荷されたという。
- (33) トゥマングン県では主にTemanggoeng副郡とTembarak副郡で煙草の全収穫を天日乾燥する。これ以外のガラングンが主に作られる副郡でも、最下層の葉はペペアン加工される[Fruin 1923a: 269, 301]。同県Parakan郡でも最下層の葉は全てペペアンに加工され、他の価値の低いペペアン煙草とともにススル(soesoer)すなわち噛み煙草用に売られるという[Stenvers 1915: 16]。またウォノソボ県でもKaliwiro副郡では若干のデサでペペアン煙草が作られていたが、小規模であった[Heijden 1935: 565]。M.W.L.[Kedoe 213]によると、ペペアン煙草の方が良質で長持ちするという。
- (34) Verslag Garoeng[1906: 587]によれば乾燥のためにできるだけ煙を出さない火を使うことが望ましいとされるが、香り付けのため、特定のシダが燃料として用いられる場合がある。刻んだ煙草を広げたリゲンは、15分程度火の上で前後に動かされる[Tabak 1925: 76]。
- (35) 出荷はリゲン単位で行われ、リゲン40枚分(エレラン200個)の煙草をまとめて周りに乾いたバナナの葉を巻いてその上を縛ったコーディー(kodi)と呼ばれるパックが用いられた[Stenvers 1915: 17~18]。
- (36) この場合、あまりに強すぎる日光に晒してもいけないので、晴天の場合には午前7時~11時、午後4時~6時に干すのが普通だった[Stenvers 1915: 7~18]。
- (37) 販売の具体的な様子はVerslag Garoeng[1906:

- 515]、Fruin[1923a: 279, 307]、Stenvers[1915: 19~20]などに詳しい。
- (38) ジャワ人商人の参入の背景には、K.V.[1892: 198]が「バゲレンでは1891年、華人買上げ者がデサから閉め出されたが、その結果、ウォノソボ(ルドック県)に定期的な煙草市が開設され、報じられるところによれば何人かの原住民が煙草の大商業に従事しはじめた。」と述べるように、政策的なバックアップがあった。
- (39) 前貸しの具体的な様相についてはM.W.H. [Kedoe 364]、Fruin[1923a: 308~309]、Mangoenkoesoemo[1929: 32~33]、Heijden[1935: 586~587]などを参照。なお、例外的にマグランの煙草中心地Moentilan郡ではジャワ人商人に対してテバサンで売ることもあったが、Fruin[1923b: 375]によるとこの商人は大土地占有者であり、彼らは自分のデサや近隣デサのあまり裕福ではないジャワ人から収穫前の煙草を買い付け、自作の煙草と一緒に加工した。加工量が多いのでコストは安く、デサBodjong在住の商人の場合には年に200ピコルを加工するが、1ピコル当たり加工経費は9ギルダ程度を越えなかった。
- (40) 煙草の流通経路とその仕組みの検討は次の課題であるが、1920年代以降には、大まかに言ってペベアン煙草はかなりの部分がクドゥスを中心としたクレテック産業と、原住民シガレット産業に向けられ、ガランガン煙草は主として西ジャワへ輸送された。これについてはさしあたりReijden[1934: 16]を参照。
- (41) 例えば1903年、Kedjadjar副郡を含むGaroeng郡の水田の対耕地面積比は15.6%にすぎない[M.W.L.Kedoe bijl.1]。この比率は1920年になってもほとんど変わらず、18.3%だった[Landbouwatlas 1926: Staat I]。
- (42) M.W.L.[Kedoe 203]によると、ケドゥ理事州の煙草3県のうちマグラんとトゥマングンでは米移入は例外的だったが、畑作煙草が卓越するウォノソボ県では平均して年に5,000ピコルの米が輸入されていたという。煙草から得られる現金収入の一部は、この米の代金に充てられていたと思われる。
- (43) この地域の土地権はデサの処分権が弱く、トゥマングン県ではtanah sanggemanとよばれるが世襲的個人占有と見なされ、またMoentilanでも同様で1920年代初には売却もしばしば行われていた[Fruin 1923a: 301, 310]。他方、Kedjadjar副郡ではこの時期、土地は固定持分制共同占有であり、デサ外への譲渡は認められていなかった[Fruin 1923a: 301]。この占有形態は1900年代も同様で、Veslag Garoeng[1906: 512]によると「ディエン地域では土地占有はいわゆる固定持分制共同占有、いわゆるtanah boedaである。定期的に耕作される土地は、全てこの共同占有である。」と述べられる。しかし同時に、ここでは耕地不足を解消するために拓かれた高い位置にある急傾斜地の開墾地は世襲的個人占有(tanah jasa)で占有されていた。1930年代になるとウォノソボ県全体で畑地の約2/3は世襲的個人占有(tanah jasan)及び固定持分制共同占有であるが、両者には事実上差はなくなり、ともに他デサ住民への売却も可能になった。もっとも畑地の1/3を占める優良地はtanah boedoであり、デサ外への売却は依然として禁じられていたという[Heijden 1935: 568]。いずれにせよ、土地売却が比較的容易であったので土地集積も早くから進行しており、例えばM.W.E.[Kedoe bijl.1]によれば、2バウを越える耕地を占有する者はマグラン県では耕地占有者全体の7.7%、トゥマングン県では8.9%、ウォノソボ県では14.0%を占めた。

- (44) 庶民金融銀行が集中的に活動したのは、このデサだけではない。1920年代初のトゥマングン県では県銀行の融資はほぼすべての煙草栽培をカバーし、毎年、このためにほぼ60万ギルダーが貸し付けられていた。また人口2万人のKedjadar副郡では、ウォノソボ県銀行が土地占有者の2/3に当たる約2,000人に対して1921年には10万ギルダー、22年には126,000ギルダーを貸し付けていた[Fruin 1923b: 382]。
- (45) スラバヤ理事州、プスキ理事州の各県銀行は、何れも貸付け引締めを強力に実施しすることにより、焦付きを防ごうとした。これについては植村[1997: 254~260, 455~463]を参照。

[引用史料・文献目録]

- 深見純生 1991: 「ジャワ島の地方行政区画—歴史的概観—」(『東洋史研究』50-2)
- 植村泰夫 1983: 「煙草栽培とプスキ農村」(『南方文化』第10輯)
- 植村泰夫 1997: 『世界恐慌とジャワ農村社会』、勁草書房
- 植村泰夫 1998: 「1910年代末~20年食糧問題とジャワ社会」(『東洋史研究』57-3)
- 植村泰夫 2001: 「植民地期インドネシアのプランテーション」(『岩波講座 東南アジア史6』、岩波書店)
- 植村泰夫 2005a: 「植民地後期ケドゥーにおけるヨーロッパ市場向け煙草栽培に関する覚書」(『広島大学大学院文学研究科論集』65巻)
- Atlas 1938: *Atlas van Tropisch Nederland, Batavia*
- Bagchus, C.W. 1929: *Maandgemiddelden en Bouwgrondoccupanties per district van de negen belangrijkste Inlandsche Landbouwgewassen op Java en Madoera in de jaren 1920 tot en met 1925 (Mededeelingen van het Centraal Kantoor voor de Statistiek, no.65)*, Batavia
- Bleeker, P. 1850-II: "Fragmenten eener Reis over Java", *Tijdschrift voor Neerlandsch Indie*, 1850-II
- C.E.I., vol.1: *Changing Economy in Indonesia, vol.1, Indonesia's Export Crops 1816~1940*, 1975, The Hague
- Crawford, J. 1820: *History of the Indian Archipelago*, vol.1~3, Edinburgh
- Deventer, S. van 1866: *Bijdragen tot de Kennis van het Landelijk Stelsel op Java*, dl.1, Zalt-Bommel
- Elson, R.E., 1994: *Village Java under the Cultivation System 1830~1870*, Sydney
- Fruin, Th., 1923a: "Een en ander over de tabakscultuur voor de Inlandsche markt in de regentschappen Bandjarnegara, Wonosobo, Temanggoeng en Magelang", *Blaadje voor het Volkscredietwezen*, 11-9
- Fruin, Th., 1923b: "Kerftabak op Java", *Koloniale Studien*, 7-2
- Heijden, R.W. van der, 1935: "Rapport betreffende de Tabakscultuur in het Regentschap Wonosobo en de Credietvoorziening der Tabaksplanters", *Volkscredietwezen*, 1935
- Houben, Vincent J.H., 1994: *Kraton and Kumpeni, Surakarta and Yogyakarta, 1830-1870*, Leiden
- I.M.: *De Indisch Mercur*
- I.V.: *Indisch Verslag*
- Jonge, H.M.Ch. de, 1984: *Juragans en Bandols, Tussenhandelaren op het Eiland Madura*, Nijmegen
- K.V.: *Koloniaal Verslag*
- Landbouwatlas 1926: *Landbouwatlas van Java en Madoera*, dl.II, Weltevreden
- M.W., vol.Va: *Onderzoek naar de Mindere Welvaart der Inlandsche Bevolking op Java*

- en Madoera, Va, Overzicht van de Uitkomsten der Gewestelijke Onderzoekingen naar de Landbouw....*, 1908, Weltevreden
- M.W.E.Kedoe : *Onderzoek naar de Mindere Welvaart der Inlandsche Bevolking op Java en Madoera, Samentrekking van de Afdeeling-verslagen over de Uitkomsten der Onderzoekingen naar de Economie van de Desa in de Residentie Kedoe*, 1908, Batavia
- M.W.I.Kedoe : *Onderzoek naar de Mindere Welvaart der Inlandsche Bevolking op Java en Madoera, Samentrekking van de Afdeeling-verslagen over de Uitkomsten der Onderzoekingen naar den Irrigatie in de Residentie Kedoe*, 1907, Batavia
- M.W.L.Kedoe : *Onderzoek naar de Mindere Welvaart der Inlandsche Bevolking op Java en Madoera, Samentrekking van de Afdeeling-verslagen over de Uitkomsten der Onderzoekingen naar den Landbouw in de Residentie Kedoe*, 1907, Batavia
- Mangoengkoesoemo, Darmawan 1929 : *Bijdrage tot de kennis van de kretekstrootjes-industrie in het regentschap Koedoes*, Batavia
- Padmo, Soegijanto 1994 : *The Cultivation of Vorstenlands Tobacco in Surakarta Residency and Besuki Tobacco in Besuki Residency and Its Impact on the Peasant Economy and Society: 1860-1960*, Yogyakarta
- Raffles, Th. S. 1817 : *The History of Java*, vol.1, London
- Reijden, B.van der, 1934 : *Rapport betreffende eene gehouden enquete naar de Arbeidstoestan den in de Industrie van Strootjes en Inheemsche Sigaretten op Java, deel I, West Java, Bandoeng*
- Soenario 1935 : “De kretekstrootjes-industrie in het regentschap Koedoes(Onderzoek gehouden in November 1934)”, *Volkscredietwezen* 1935
- Stenvers, W. 1915 : “De Cultuur en Bereiding van Tabak voor de Inlandsche Markt in Oud Kedoe”, *Pemimpin Pengoesaha Tanah*, no.9/10
- Tabak 1925 : *Tabak, Tabakscultuur en Tabaksproducten van Nederlandsch-Indie*, Weltevreden
- UEMURA Yasuo, 2002 : “Tobacco Cultivation in Besuki under the Great Depression”, *Hiroshima Interdisciplinary Studies in the Humanities*, vol.,1
- Verslag Garoeng 1906 : “Verslag over de Tabakscultuur in het District Garoeng der Residentie Kedoe”, *Teysmannia*, vol.XVII
- 【付記】
本稿は平成16～19年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))「植民地後期ジャワ住民煙草産業史研究」による研究成果の一部である。
- (広島大学大学院文学研究科教授)